

---

# 世界はとりあえず優しくはなかったようです

紅月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界はとりあえず優しくはなかったようです

### 【Nコード】

N2019L

### 【作者名】

紅月

### 【あらすじ】

どうやらここは異世界のようなです。巻き込まれてやってきました花の十七歳、吉住梓。魔法が使えない？言葉も通じない？神様助けてー！！……えっ、あんた神様だったの！？（不定期更新です。感想、評価をお待ちしております。）

始まりは唐突にあり得ないほど分かりやすい巻き込まれ方でした

どことも知れない場所。どこにでもあるような場所。そう、例えば今彼女がいる通学路とか。

もともと人がほとんど通らない場所にこの日は二人いて珍しいなあと思っていたのもつかんの間。どうやら追う者、追われる者、という関係に見えたのでかわり合いにならないでおこう、と歩いてきた道の端に移動しようとして、巻き込まれた。

なぜか手をつしりとつかんだ、追われている方はそのまま走っていく。彼女は進行方向に背を向けたまま引きずられるように進んでいく。まあ、進行方向は見ない方がよかったのかもしれない。

(私を引きずってるのにスピードが落ちないなんてすごいなあ。)

こんなことを彼女が考えていたのはおそらくあまりにも突然すぎて理解が追いつかなかっただろう。そして、追いついた時にはもう遅かった。

後ろが見えなくてよかった理由。黒い空間が口を開くようにはっくりと開いていて彼女を引きずっている人ごと飲み込んでしまったのだから。

「ちっ、逃がしたか。だがそれなりに傷を負わせたはずだ。」

追いかけていた方はそう言ってその場からいなくなる。

一方、巻き込まれた彼女はというと。

一人で、手に剣を持った兵士たちに囲まれておりましたとき。

当たり前ですが、見知らぬ土地です

吉住梓<sup>よしずみあやね</sup>、十七歳。性別は女。モットーは君子危うきに近寄らず。

とは言っても気付けばいつも「危うき」が近づいてくる巻き込まれ体質、でもなかったはず。

「いやいや、ちょっと待て」

現在の彼女は現状把握に努めていた。周りは見たこともない場所。少なくとも自分の周辺にはなかったはずのもの。

「たしか、追いかけてっこしている二人組みと関わらないようにして道の端に寄ろうとしたらなぜか腕をつかまれて。で、気付けばここにいると」

つまり、自分がこんな目にあっているのは連れてきたやつがいるからで、そいつに聞けば帰ることもできるだろう。という考えにいたる。どこにいるのかは知らないが。

探そうにも知らないところなので探す当てもない。そもそも誰かも分からないので探す、ということすら無駄だろう。

「帰る。って表現しかないわよね。少なくともここは日本じゃないだろうし」

服装はセーラー服。それは別にいい。でも、周りがおかしいといつか普通じゃない。少なくとも彼女の身近な建物はコンクリートを基盤にしているものだったし、火が上がっていたりはしない。建物の形だってこんなテントのようなものは彼女の知る限りの身近にはなかったはずのものだ。

「で、何処なんだろう、こじ……」  
《さあ？》

突然の返答にびくりと体が震える。梓にしてみれば答えが返ってこないことが前提の呟きだったのに。声の感じからして男の声が聞こえた。

恐るべき速度で梓はあたりを見回した。

「ちよ、誰ですか、あなた」

《誰でしょうかー》

梓がものすごく慌てているのに対し声はからかうように返事をする。周りにはそれっぽい人はいない。

幻聴かとも思ったが、残念なことに、もしくは幸いなことに、梓にはたった一人だけの心当たりがあった。

4

「まさかとは思いますが、私を巻き込んだ人、じゃないですよね」  
《おお、意外にいい感じしてるな。その通りだ》

「マジですか……」

《本当です》

こめかみを押さえて、深く息を吐いた。ゆっくり落ち着いて考えをみるが考えはまとまらなかったようで、何も言わずに歩き出す。この周辺はどうにも戦場の跡のような場所らしい。うまく行けば誰かと会えるかもしれない。

その誰かが友好的な人物であることを願おう。間違っても死にそうな人や、攻撃的な人ではありませんように。梓は強くそう思い歩き出した。

《おい。どこに行くんだ？》

《なーなー》

《……えーテストス。聞こえてますかー》

《本日は晴天なりー》

《あの、無視しないで……》

幻聴、そう、これは幻聴だと思い込んで歩く梓だったが、さすがに涙声になられると反応せざるを得なかったようだ。大きくため息をつく。

《ため息つくと幸せが逃げるよ》

「もつすでに、幸せな状況じゃないからどうでもいい。で、なによ」

《……口調がさっきと違う気がするけど、まあいいや。ところで、なんか俺に聞きたいことってないの？》

口調が変わったのは単純に相手がどうでもいい相手だと思っただけである。そもそも、梓を巻き込んでこんな目にあわせる相手に敬意を払うほどの心の広さは彼女にはない。

しかし、いろいろ教えてくれるかもしれないのなら無視するわけにもいかない。

「答えてくれるの？」

《俺が分かる範囲なら》

「じゃ、何でこんなことになったか説明してよ」

というわけで、以下説明。

なんでも、この声の主は敵に追われていたらしい。その逃げる途中で梓を発見。敵に捕まって巻き込まれるとかわいそうなので引張って逃亡。そのまま、ここへ。

この流れだけを見ると、声の主に引きずられなかったら梓が巻き

込まれる確率なんてなかったようにも見える。というかどこにも見当たらない。

《ちなみにここはお前から見たら異世界になるな》

「ずいぶんと的確な説明ありがとう。で、どうやったら戻れるの？」

《……》

「おい」

《……あはははは》

「そんな笑いにごまかされると思うなよ」

梓の据わった低い声に気圧されたのか乾いた笑いを浮かべた声の主を梓はさらに問い詰めていく。

声の主曰く、自分では行き先を決めれないとのこと。役立たずだ、とは思ったがあきらめる。見えない相手に突っかかっていられるほどの余裕は梓にはないのだ。

帰る方法は、これまたいるのか分からない別の誰かに聞いてみることにして次の質問。

「あんたは何処にいるの？」

《え？ お前の心の中》

「何処にいるの？」

《だから、お前の心の中》

「そんなにあんたはお茶目な冗談が言いたいのか」

なんとも寒い発言である。そういうのはお前の彼女に言えよ、と思っても言わない。というよりも殴ってやりたくなる言葉の軽さである。梓を巻き込んだという申し訳ない感じが伝わってこない。

《いやー。ここに来る途中で空間転移をしようとしたところまでは良かったんだけどな。空間の、というか狭間の歪みの影響を受けた

みたいで、なんか変な反応が起きたと思ったらこんなことに」  
「じゃあなに？ あんと私は感覚を共有してたりするわけ？」  
《さあ。試してないから知らんけど、視界は共有してるんじゃないのか？ 右向いてみるよ》

あわてて弁解する相手に文句を言う気も失せたようで、梓は右を向いた。

すると声の主も右のほうに視界が動いたとか言ってくる。ためしにとがったもので手のひらを突いてみたが向こうは痛くも痒くもないらしい。

骨折り損ならぬ痛み損である。

(なにこの、卑怯な感じ)

《卑怯って言われても感じないものは仕方ない》

「読心術まで」

《というより、精神も共有してる感じじゃないか？ 主導権はお前で》

もう、何でもあり。じゃあ、魔法が使えるのかというが無理、の一言で返される。一体何のために異世界にきたのか分からなくなる。間違いなく魔法が使いたかったわけではない。おまけに、何か目的があったわけではないけれど。

声の主が至って冷静だな、と言ってくるが、これは冷静ではなくてどっちかというとパニックが一回りした結果だと思つと返す。

《なるほど》

「なに納得してんの？ 誰のせいでこんなことになったと」

《それは、その……。すみません》

それよりも、と梓はまた考えることにする。こういうとき、小説



だどどうやって帰るか。

- ・どこぞにいる魔王を倒してハッピーエンディングによる夢オチ。そもそも魔王がいるかも分からないので却下。
- ・自分が魔法を使えるようになって自力で帰る。魔法を使うことができないらしいから無理。

・どこぞの神殿に異世界と繋がってる扉があるのでそこから帰還。神ってのは何処の世界にもいるけど、そんな扉はそうそうないらしい。むしろ神自身が作り出す物らしいのでその場限りな物だとか。実はここは異世界ではありませんでした。ここはどう見ても異世界なのでそんなことはありえない、はず。

・はるか未来に行つて、そういうことができそうな人を探す。神様でもないし時間移動はできないらしいので無理。

「それだ!!」

《な、なんだよ突然》

「そうだよ。神様つてのがいたじゃない!!」

《は?》

「異世界に繋がる扉なんて滅多にないんですよ?」

《ああ、まあ》

「で、神様つてのはこの世界にもいるんだよね。」

《多分。力の差はあるがたいしてどこの世界にもいるもんだし》

「じゃあ、その神様に帰してもらえば完璧じゃない?」

そう、神の力は何処の世界でもチート級だ。アニメしかり、漫画しかり、小説しかり。神にできないことはないと言つてもいいくらいに、万能だ。どこぞの神殿に行けば神の情報くらい得ることはできるだろう。

こんなにも、非常識というか現実的でない考えが出てきて、梓のパニックが一周半くらいにさしかかったところに声の主が絶望的なことを言い出す。

《テンションが上がってるところ悪いけど、それは無理》

「へ？」

間抜けな音が梓の口から漏れる。

膨れ上がったテンションがしばむ音が聞こえるそうなくらいである。

《異世界につなげても行き先まで指定できるやつなんて滅多にない》

「なんで？」

《そりゃあ、その神のランクにもよるけど。行き先まで指定できるとしたら原初の神に連なる幹部連中じゃないと無理。狭間の穴を開けるだけならその気になれば誰にでもできるんだけどな》

「空間転移と狭間ってどう違うの？」

《空間転移ってのは瞬間移動みたいなやつ。狭間ってのは世界と世界の間にある空間のことだな、なんていうか、そう。星と星の間にある宇宙空間みたいなやつ》

他にも説明を続けるが、まとめると、狭間を簡単に移動できる存在はかなり限られるらしい。しかも狭間は常に一定ではなく移動中に変な力がかかったりもするため、安定した移動ができないとのこと。たとえ神だとしても難しいらしい。

梓にくつついているやつも、狭間へ行くだけならできるが自由に移動はできないらしい。

「嘘」

《嘘じゃないって。俺が言うから間違いない》

「なんで、あんたが言うから、なのよ」

《だって俺、神様だし》

沈黙。

「嘘だあああああああああああああー!!」

梓のその叫びはかなりの距離に響きまくったことだろう。それくらいに大きな声だった。

さて、梓たちの周りが戦場の跡だというなら当然のようにそこで戦闘を行った者達がいる。

「隊長!」

「どうした」

「なにやら人の声が聞こえたとのことですが」

「まだ、人が残っていたか」

「どうしますか」

「決まっている。俺たちに出された命令はこの部族の人間を根絶やしにすること。ならば生き残っている人間がいることは許されない。すぐに向かうから何人か準備しろ」

撤退の準備をはじめていたうちの数名が武装し、隊長と呼ばれた男と一緒に声の方へと向かっていく。一度は嚴重に見回ったのだが、このような取りこぼしが他にもないように部下に道中の見回りを嚴重にするように命令する。

声が出た方向へ向かう。そこはこの部族が儀式や祭りをするのに使っていたという広場だ。そこには確かに人がいた。だが。

「隊長。あの娘、気が触れてるんじゃないですか?」

「この部族の衣装はあんなものではなかったと思いますが」

広場にいる人間。まだ成人にもなっていないであろう少女 梓  
がいる。だが、その少女は彼らに気付くことなく何かを喋っており、  
その言語は彼らには理解できないものだ。相手もいないのに喋って  
いるとは気が触れているとしか彼らには思えなかったらしい。

また、この部族はゆったりとした露出の少ない服を着ているのに、  
少女の着ているものは上はともかく、下はとても短く、太ももの半  
分ほどまでしか丈がない。

「この者ではないのか……？」

「隊長、どうしましょうか」

ここにいる以上、殺すべき相手なのだろうが隊長と呼ばれた男は  
しばらく迷った後に命令を下した。

「服装、言葉などからこの部族のものとは考えづらい。何者かも分  
からないからとりあえず首都へ連れて行き、帝に指示を仰ぐ」

「はっ」

「では、俺の合図でいっせいに攻撃を仕掛ける」

だって役立たずだから

「マジか。本気であんたが神様なのか」

《そうそう》

「私、もう神様なんて信じないよ」

もともと宗教などには欠片も興味が無かったわけだが、声の主が神様という状況に陥ったことにより梓の中での神様のランクがガンガン暴落していく。

地面に手をつけて落ち込みたかったがなぜだかそうすると立ち上がる気力がなくなりそうなので立ったままでいる梓。

「じゃあ、名前は何ていうの？」

このまま神様と呼ぶのもいやだったので梓は気分を変えるつもりで相手に尋ねた。

《なんでそんなこと聞くんだ？ 神様って呼べばいいじゃないか》

「そうですかへっばこ神様。」

《……》

「どうしたの、ダメ神様」

《すみません。やっぱり名乗らせてください》

巻き込まれた腹いせとして神様の前にいろいろつけていた梓の言葉に耐えられなくなったのか、相手が謝ってきた。

土下座をしているような感じの半泣き声だ。下手したらすでに泣いているかもしれない勢いだったので、かわいそうだと思った梓はそれじゃあ名乗れと促した。

《俺の名前はハルだ》  
「聞いたこともない」

胸を張るような（ついさっきまで半泣きだったよな、というのは梓の心の声）声音の神、ハルだったが、梓の切り返しに泣き出してしまった。宿めるとあっさりと泣き止む。

（神つてのはこんなにも扱いづらいものなのか……）

《俺が扱いにくいわけねーだろ。それでも仲間内で一番扱いやすいつて言われてたんだぞ》

「それは単にパシリに使われていただけじゃないのか？」

あまりにも役立たずな感じしかしてこない発言に、梓は再び地面に手をつきたくなるような気分に襲われ、それを気力でねじ伏せてなんとか立った姿勢を維持する。このまま途方に暮れたままでもいいのだろうがそれではここで死んでしまいかねない。

なにせここは今も火が燃えている、いかにも戦場でした感がある場所だ。落武者や性格のねじ曲がった兵士に出くわすなどもつての他。

《いや、落武者ってどうだろう》

「うるさい。こういうとき、小説とかだと必ず何か出てくるんだよ」

本当ならそんなこともないだろうが、梓の状況がすでに小説や漫画になっていてもおかしくない状況である。

「少しでもその確率を下げたい私がどう行動しようか勝手に勝手に」

だが残念。ここについてすぐに移動を始めたなら梓はつまり具合に他の人と会わずにすんだかもしれない。

「  
うええ？」

我ながらおかしな声をあげたと思いつながら振り向いたそこには鎧を来た人が数人、梓に剣を向けていた。

隊長は、指揮をする。いつも通りのそれにもいつも通りの行動をする部下たち。彼らがここに来た目的は殲滅だが今の目的は目の前の少女の捕縛である。当然できることも限られてくる。

「拘束！！」

「はっ！！ 『水宿し精霊よ、我に力を、拘束』」

少女に向かって水球が飛んでいく。魔法による拘束はそれなりに強固で、双方にとって安全な方法である。それは少女にあたり、少女の手足を拘束する。

「なっ、なんだと!？」

はずだった。しかし、予想に反して水球は少女にある程度近づいたところで消滅した。他の部下や、隊長自身が魔法を打ち込んでみても結果は同じ。

思わず少女から目を離し、部下たちが隊長を見る。なにやら思っているところがあるようだ。

「隊長。これは……」

「ああ、《仮面》のやつらと同じ現象だな」

最近この国を騒がせている集団。顔はわからず民族的な仮面を顔につけ、それぞれが圧倒的な魔力を持ち、主に国が所有、管理をしているところで騒ぎを起こしている。おそらくここ最近の政への反発まつりごとなのだろうが、ただの反乱分子というわけでもない。

ただ魔力が大きいだけなら相手の魔法がどれ程大きなものでも防ぎ、反撃し、とらえればいい。だがしかし、やつらに魔法を放つてもそれらはすべて、今日の前で起きたようにかき消されてしまう。

彼らがここへ来たのも、ここの部族が仮面と関係があるのではないかと言う話があったからだ。

目の前の少女は仮面をつけてはいないものの、魔法をかき消して見せた。この部族のものではないであろうが、関係があるかもしれないとなると、なんとしても捕まえ、帝の前に連れていかないとけない。

「ならば、カづくで!!」

隊長の合図により少女の方を向いた彼らの目の前に少女の姿は無かった。

梓は走っていた。それはもう、全力で。全力で走るのはいつ以来だと思ふのと同時に、どうしてももっと体を鍛えておかなかつたのかと後悔していた。

物陰に隠れてしばし休憩。

《何で逃げてんだよ》

「当たり前。あんた、いきなり魔法をぶっぱなしてくる連中にほい



「はい近寄れる？」

《無理》

「でしょ。それに言葉もわからなかったし」

予想通り兵士が現れたのは（よくないけど）よしとしよう。でもその後、いきなり魔法を放ってきた。目の前で消えなかったらどういうことになっていただろうか。

おまけに梓を呼び止めた言葉も魔法を放った後に話していた言葉も梓には理解できないものだった。つまり、敵意はないという意思疎通を行うことも、無理。

梓は音がしたから振り向いただけなのだ。あんな得体の知れない人間には近寄らない方が吉というものである。

「どう考えてもハッピーエンドが見えないじゃん」

《いやでも、このまま逃げ続けても先にあるのはバッドエンドだろうが》

（本当にこの（自称）神様はうっざいなあ。というかこいつのせいで梓はこんな目にあっているのは間違いないはずだ。少しくらい役に立ってくれたっていいだろうに）

梓の心の声を聞いたハルが、それを聞いて文句を言った。何でも俺は思ったことを言っているだけでうざくはないと。

《俺役に立つよー。何でも質問してー》

「よくさあ、あるじゃん。異世界召喚系のに。こう、言葉は神の力で以下略ってやつ」

《うんうん。》

「あれってできないの？」

《ああそれ？》

「うん、それ」

《無理》

「……やっぱり使えないね、あんた」

大げさにため息をつく梓。梓のことが見えているわけではないが、秀囲気でわかつたらしいハルは梓に説明を始める。

《いーか。お前は俺のことを使えない使えないって言ってるけどな、仕方ないんだよ》

「ほう、どう仕方ない？」

《俺がもともといたのはお前と同じ世界だ。当然こちらの言葉はわからん。わからんものは訳すこともできない。おわかり？》

そう言われると、納得してしまう。確かに梓は外国語として英語を勉強しているが急にドイツ語を話せと言われても困る。しきりに頷いていると、ハルはさらに話を続けた。

《それに、魔法はなぜか使えないが他のやつにはできない芸当がお前にはできるぞ》

「なに？」

《さっきわかつたんだがな。どうやら一定範囲に進入してきた魔法は強制的に消し去ることができるみたいだ。》

「つまり？」

《お前の腕っ節にもよるけど、相手が近接戦闘だめな魔術師に対しては最強。それこそチート級だな。あと、魔法しか届かないような超長距離戦もだな。こっちからもなにもできんが》

そう言っつてハルはからからと笑う。本人は元氣付けるためのつもりだったのだろう。だが反対に落ち込む梓。その能力はこの状況を打破するには全く使えないからだ。実際にその能力のせいで話が少しばかりややこしくなっていることは梓は知らないのだけだ。

おまけに梓の強さなど、一般の女子高生よりも弱いくらいだ。腕立てなんて五回ぐらいしか連続でできない。

とりあえず戻るわけにもいかないのだからさっきの兵士どもがいたであろう方向とは逆方向に歩き出す。

《あと、もう一つ。俺の神としての能力があるんだけどな。そいつ、なんでかよくわかんねーけどうまく使えないんだよ。使おうと思っても力をうまく制御できない》

あまりにも残酷な追い討ちだった。

《なんか落ち込んだみたいだけど大丈夫か？》

「あまりの使えなさに絶望したんだよ。」

《うわ、ひどっ。それのおかげでさっきは助かったというのに》

「あーあーありがとっございますー」

《……超棒読みだな》

実際そうだろう。急に異世界に連れてきたあげく、帰る方法があるけど難しいです。自力での解決はほぼ間違いなく無理とか、どう感謝しろと、と思う梓。そうするとハルのすすり泣くような声が聞こえてくる。読心術があるのをすっかり忘れていた。

「本当にやってらんない」

泣きたいのはこっちだったっーのという言葉はハルにも聞こえていなかったようだった。

「さっきは動揺しましたがけど彼女は本当に《仮面》の仲間なんでし

ようかね」

ぼつりと言ったのは始めに少女に拘束魔法を放った部下だ。どうやら彼はそれを口にしたことを自覚していなかったらしく、他の部下に言われて気づく。

「すみません。変なことを言って」

隊長の視線に気づいてあわてて頭を下げる部下に隊長はそう思った理由を言うように促す。気まずそうにしていたが部下はやがて話し始めた。

「それでは。まず彼女はこの国の人間ではないと思われます。理由としてはあの服装と言葉です。

見た目は確かにこの国の人間に近かったですが、こちらではあんな丈の短いものをはく人間はなかなかいません。というより皆無です」

あんな丈の、というのは梓の制服のスカートのことで、この国の人間は<sup>女性</sup>基本的に見えなほほど長い丈のものをはいている。

「言葉は聞いての通りですな。

《仮面》の仲間ではないと思つたのもこれが理由なんですけど、やつらとはちゃんと会話できるんですよ」

どうやらこの部下は一度仮面の連中と会つたことがあるらしい。だからこそその言葉なのだろう。

一応は理にかなつている部下の言葉はそこで終わりを迎える。自分でいって見たもののいまいちな推論だと思つているのか顔はどうか不安げだ。

「では西の国の者が」  
「それもわかりません。自分は向こうの言葉は全くわかりませんので」

隊長の言葉に部下が反応する。ここには他にももう二人の部下がいるがその二人もなにも言わない。一人は搜索魔法を行使しているのだが、もう一人は何か思うところでもあるのだろうか。何も言わないが、顔をしかめている。

「隊長、見つけました」

その報告を受けて隊長は彼女への再接近を図るべく指示を出した。

「そのままじゃどうしようもないので

梓が先程の兵士たちと再会するまでの時間はそこまで長くはなかった。物陰に潜みつつ移動していたら目の前にいたので、方向を変えて進むと別の人がいた。

気づけば梓が隠れているところは囲まれていた。

「うわ、詰んだ」

『何言ってるんだよ。お前には魔法を消し去る力があるだろう。それで突破すればいいだろうが』

「じゃあ、あんたが行ってこい。」

魔法を消し去る力？ それだけであの、いかにも近距離戦ができてそんな兵士たちの包囲網を突破できるはずがない。

それができる自信があればさっさと立ち向かっている。

（うーん、どうしようか）

『悩んでないで突っ込んでみるよ』

「殺されない、という保証があるならね」

ハルに返事をしつつ考えていることがあった。投降すればいいのではないのだろうか。

投降、という言葉を使うと自分がまるで犯罪者になったような気分になった梓であったが言葉がほかに思い浮かばなかったし、それ以外の言葉を捜している暇もなかった。

（降参の両手をあげるあのポーズはここでも通じるのかな？）

『やってみれば』

読心術によるなげやりな返答に殺意を覚えるが、このままの状態を続けるのも梓の精神衛生上、非常によくはない。仕方がないのでハルの言う通りにやってみることにする。

もしも問題があるとすれば、出るタイミングが分からないことと、出た瞬間に攻撃されるのではないかの二つであった。

(え、どう考えても死活問題なんですけど……)

少女を囲んだものの、彼女には魔法が通じないので魔法で威嚇ができないだろうということからなにもできなくなった。本当は一斉に斬り込んでもいいのかもしれないが、相手は任務とは関係のない少女だという可能性が高いことが、それに歯止めをかけていた。

時折、少女が何かを言っているが詳しくは聞き取れないし、動くような気配もない。このままではらちが明かないと思い近寄るように指示を出す。もちろん突然襲われても対応できるように剣は抜いておくようにとも指示しておく。

一歩。

二歩。

まだ少女が動く気配はない。

三歩。

四歩。

五歩目を踏み出した瞬間に少女が飛び出してきた。身構えたものの彼女は襲ってくるようなことはせず、両手を上げた。

「まずい、まずい、まずい」

相手方と梓の距離は徐々に無くなってきている。剣も構えている。このままではバッドエンドに向けて一直線だ。

『どつするんだよ!?!』

「何であんたの方がそんなに慌ててんの!?!」

このままではどうしようもない。成り行きに任せることにして、梓は意を決して飛び出した。

もちろん、両手を上げて。

ところが、相手の反応が何か鈍い。もしや、これは降参を意味しないのか、と考えるが、梓は間違えてはいない。実は向こうは梓が襲いかかって来ると思い構えていただけなのだった。

しばらくすると全員が構えていた剣を鞘に納める。無事に(?!)  
切り抜けられたことに安堵の息を漏らしていると、一人が縄をもつて近づいてきて手首と足首がそれなりの余裕をもつて縛られる。殺されなかっただけよしとしようと思いつつも、事態は一切好転していないことに不安も覚える。

「これからどうなると思う?」

『知らね。まあ、この感じだと何処かに連れて行かれるっばいけど』

逃げない方がいいことはわかっているし、逃げれるとも思っていない。このまま逃げ続けるのも得策ではないので彼らにその『何処か』まで連れていってもらいたい。できればそこでなんとかできないものだろうか。

だが、これで連れていかれた先が処刑場だったりしたら目も当て



られない。

知り合いが誰もいないところで何の罪もなく処刑されて人生を終えるなんてたまったもんじゃない。まあ、そうなるとは決まったものではないのだけど。

道中はたいしたことはなかった、というよりも何もなかった。

梓を連行している兵士たちはなにやら腫れ物に触るような態度をとるし、たまにハルと話していると不気味そうにこちらを見ているだけ。見ている彼らの方が不気味に見えるくらいだ。多分、全くわからない言葉を喋っていることを気味悪がっているのだらうとは思うけれど、そこまで露骨に避けられると梓もつらい。

移動は徒歩ではなくて、馬車であった。梓は隊長格の人ようなど一緒に乗せられている。この人はそこまで梓を避けたりしないので梓としても気が楽である。一時期は他の兵士と同じように幌馬車に乗っていたのだけど、彼らの対応を見た隊長が自分のところに乗るようにと自分の馬車へと梓を引きずっていったのだ。

彼はちよくちよく梓に声をかけてくれる。ジェスチャーを交えてくれて何を言いたいのかはなんとなくわかるときもあるが、何を言っているのかをちゃんと理解したことはいまだに無い。

(自分の国から出ることはないと思ってたから考えたことも無かったけど、言葉が通じないってこんなに不便なことだったんだ)

『そうだよなー。あーあ、あんなことをしなけりゃあんなことにはならなかったのに』

もとの世界に帰ったらいつでも会話できるくらいになれるように真面目に語学の勉強をしよう。この国のととは違うけど、と梓は心に固く誓う。それよりもいま、ハルは少しばかり気になることを言った。

「あんなことって？」

『俺があいつのぶ……あいつを裏切らなけりやっつてことだよ』

「それを言うなら私はあんたに引きずられなかったらここにはいなかったはずなんだけど？」

『それはもう、本当にすいませんでした』

ハルのことを責めながらも、そういえばそんなことも言っていたなとすっかり忘れていたことを思い出す。訂正するような妙な間を置いてハルが喋ったことは気になったが追求はせずに、同乗している隊長の方を見る。向かい合って座っていた彼は梓の方をじつと見ていた。何か粗相をしたのだろうか。梓は考えたが、この人は梓が喋りだすといつもこんな感じだと思い出すと何も無かったように外を眺めた。

この世界の太陽が東から上って西に沈むものなのかは知らないけれど、梓の感覚ではおよそ南から北に向かっている。この辺は畜産農業が盛んなのか、羊、牛、豚をよく見る。

梓のいた場所が火の海だったことと比べると随分とのんびりした感じである。いや、あっちの方が異常だったのだろう。どう考えてもそうとしか思えない。時々、こちらに向けて手を振る人がいることから、この兵士達は悪い人ではないのだろうと思えた。それだけが救いなのかもしれない。

走行しているうちのどかな牧畜地帯を抜け、農業地帯に入る。

ここの主食は米だろうか。青く、いまだ成長過程にあるような感じの稲が風に揺られている。そのことから、季節は梓のいたところとおよそ変わらないだろうことが予想できた。そして、その農業地帯を抜けると、まばらに見えていただけの家がどんどん増えていく。進めば進むほど家の作りはすっかりとした物になっていくように感じる。それにあわせて人も増えてきた。梓には見えていなかったが、馬車の正面には大きな屋敷が存在している。馬車はそのままその屋敷の中へと入っていく。実に十日ほどの旅路はここで終了した。

ここは、東の国と呼ばれるところ。そして、梓がつれてこられた

場所はこの国の首都の中心にして、すべての中心となっているところ。帝とその親族が住み、国の政治を執り行う、皇居と呼ばれるところであった。

隊長である彼、朱旺<sup>シュオウ</sup>は部下の一人からの報告を受けていた。

「えらい熱のこもった目で見ているやつがいます。そういう趣味のやつだとは思っていませんが、しかし尋常ではない何かを感じましたので一応、報告をと思ひまして」

なんでも、その部下はかつてこの国の不正を正すべく現れた『神降ろし』だと言っている仲間を見て信仰が厚いのは素晴らしいことではあるが、言葉が通じない少女にそこまで言い切るとは何かおかしい、と思ったために報告してきたらしい。

朱旺は目の前に座る少女に目を向ける。時折、何かをしゃべるがそれらはすべて彼に理解できるものではなかったが、聞き取るうと努力をする。

十日ほど、どうにかして緊張を解いてほしいと思っっているやうだが無理だったようだ。久しぶりに帰ってきた都。皇居の門をくぐった。

彼はあきらめて彼女に馬車から降りるようにと促した。

## 二次元の世界？

梓が馬車を降りて一番始めに思ったこと。というか口にした一言。

「うーんと……。あれだ。お金大好き少女が金に釣られて皇帝の嫁になった後に官吏を目指す世界ですか？」

《いや、違うだろ。多分。てか、それは何の話のことだ？》

はじめは十二の国に麒麟と王がいる世界かとも思ったがそれとは違うな、と梓が思った結果の発言だった。

連れてこられた屋敷は寝殿造りとは違う感じの豪邸で、どこの貴族のお屋敷ですか。ああ、いよいよバッドエンドへ向けてのラストパートが開始するのだろうか。

「ああ、お母様お父様。梓はこの地で散ってしまうようです」

《まだそう決まってるないだろ》

「いや、捕まってるこんなところまで来たらほぼ詰みかなーと」

もちろん梓だって死ぬことを受け入れているわけではない。むしろ機会さえあれば逃げ出そうとも考えている。

だが横には先程まで一緒に馬車に乗っていた隊長らしき人。後ろには馬車を通ったあとに閉じてしまった重そうな門（どうやらスイッチ式のようだ）。前には大きな屋敷。しかもまだ梓の足には鎖がついている。こんなじゃあともじやないが逃げ切れそうもない。だが、そうだとしても。

「ああ、逃げたい。逃げたいに決まってるじゃない！！」

考えても打開する方法が見つからず苛々して叫んだ梓を隊長と、

その隊長と話していた門番の人がぎよつとして梓を見た。梓はそれに気づかず、地団駄を踏み空を見上げた。青い空が広がる。

(この空に向かって飛んでいけたら逃げていけるのに)

《I can fly. ってか？ 無理無理無理無理無理》

「……」

なんかもつ、色々と台無しだった。

一方の隊長こと朱旺はというと。

「……という訳で帝の指示を仰ごうと思いましたが、どうにかならんか？」

「仕事の報告の際になら別にいいんですけど、大丈夫なんですか？ 突然叫んだりしますし、帝の御身に危険が及びでもしたら大変なことになりますよ」

主に私たちの首がね。と茶化すがそれは冗談ではない。

当代帝は政治手腕は一流であるものの、強硬な態度をとり物事を押し進める一面も持ち合わせている。今回の遠征も帝が情報を手に入れた瞬間に決断したようなもので、特に入念な調査などはしていない。《仮面》の関係での遠征もこれが初めてという訳でもなく部下も隊長本人もまたか、という程度にしか考えていなかった。

とにかく、今の帝は政治的手腕は素晴らしいが人間としてはいまいちな人物なのだった。

「俺だつてまさかこんなことになるなんて思つてもなかつた」

他のみんなだつてそうだ。道中で部下たちが「何でこんな厄介なものがこんなときに出てくるんだよ」とぼやいていたと門番に話すともものすごく納得された。

だれだつて、予定外のことなどしたくないものだ。この少女がいなければ朱旺も文面だけの報告で終わらせていたかつたくらいだ。

「でも、ほら、何ていうやつだつたかな。一人だけやけに熱のこもつた目で見えていたのがいたんだが」

報告を受けてから、その部下をしつかり見ていて朱旺は確かにそいつがやばそうなことに気づいた。

他の部下の反応よりも、その一人の反応の方が危ないと感じた。他の部下たちが突然現れた少女を気味悪がり、近づこうとも近寄らせようともしないのに対し、そいつだけが少女に近づこうとするのだ。それもあつて、彼は少女を自分と同じ馬車に乗せてここまでつれてきた。

言葉が通じないとはいえ年頃の少女なのだ。見知らぬ土地にたった一人なのだ。そういう目で見るのが一人だつたとはいえ、貞操の危機は守つてやらねばならぬだろう。

帝に報告する時ならと言われたのでその時まではきちんと見張つていよう。逃げ出されでもしたら問題になつてしまふ。幸いなことにそこまで時間はかからない。時間はかからないが間違いなく昼過ぎになるだろうことを考えて隊長は梓についてくるようにということとを伝えようと手招きして歩き出す。

幸いなことにそれは少女に通じたらしく、彼女は不安げながらも隊長についてきた。

「こっつてほんと、どこなんだろう」

梓がついていった先は食堂であろう場所だった。彼女をここまで連れてきた隊長が適当に見繕って料理を持ってきてくれた。

この世界の食事は梓がいたところのものとはほとんど相違がなく、梓も抵抗なく受け入れることができていた。今まではおにぎりと適当なおかずをもらっていた梓。

だが、今日の前にあるのは間違いなく高級と言われるような物ばかりだった。

「こんな簡単に、こんなすごい料理が出てくるこっつて、ほんとどこなんだろう」

《とりあえず考えるのは後にして食べよ。つーか、お前が食わなかったらあいつも食わねーぞ?》

「わかってるって」

梓の目の前には料理を調達してきた隊長の姿がある。彼はここにくるまでもそうだったが、梓が食事に手をつけるまで彼も手をつけないのだ。正直、気にせず食べてくれないのだがと梓は思っていた。やはり、ものめずらしいのだろうか。さすがに、十日間もこの国を見ていると自分の容姿、主に着ている服が大きく違っていることがわかっていて。さしずめ自分は動物園の動物、といったところだろうと予想をつける。

そんなことを考えているとおなかになった。結局のところお腹がすいていたのでとりあえず、食べる。隊長も食べ始める。

『  
』

食事がこの世界に着てから食べたものの中で一番おいしかったことと、時々、隊長の知り合いみたいな人たちがこちらにやって来るがそれ以外はいたっていつも通りだった。

とりあえず、普段は使う食堂にまでつれてきた。ここは皇居の敷地内にありながらも、帝たちの皇帝一家が暮らす場所からはかなりの距離がある。利用者は主に皇居内で働く文官や鍛錬を行う武官である。値段がそれなりにするため、ある程度の地位からでないと利用するには懐に厳しい。その代わりに味は保障されている。

これから昼時なのでどんどん人が増えてくる。

入り口からは遠いが、一番奥でもない場所をとった朱旺たちはとても目を引いたらしく、彼の知り合いが何人も声をかけてきた。

「どうしたんだよ、そんなかわいいやつ連れてきて。恋人か？」

「任務に行ったときにちよつとな」

何度か朱旺にかけられた言葉は大抵がそんなものだった。

どう見ても違うことはわかるだろうがそんな冷やかしをされるということはほかの連中は暇なのだろう。彼は聞かれる度に同じことを返していたが、さすがにうんざりしてきた。

それしかお前らの頭にはないのかと怒鳴ってやりたい気持ちがあるが、それは余計な問題を引き起こすだけなのでこらえている。そこで仕方なしに、目の前の少女を観察することにする。

食事を始めるのは梓が先でも食べ終わるのは朱旺の方が早い。やることもなく、こんな質問ばかりされていたのでは嫌気もさすだろう。もちろん、梓を観察してもその嫌気が消えることはないのだが、目の前の彼女には何の非もない。

目の前の梓が食事を終えたので、この場から立ち去ることにする。



立ち上がって食器を二つに分けて、片方を梓に持たせて返却場所へ持っていかせて、食器を指定の場所へ戻してから外へ出る。

「これからお楽しみか？」

「ああそうだな。帝とのお見合いだよ」

「そいつは笑えないな」

下品な質問だと思いながら適当に帰す。質問したやつは笑えない、そう言いながらも笑いながらそいつは去っていった。隊長は顔を引き締めて、梓をつれて歩き出す。珍しいものを見ている感じなのだろう。梓は辺りをきよろきよろと見ながら隊長についていく。

歩くこと十数分。目の前にある大きな扉が開いた。

## きんきんきらきら

目の前の豪華に装飾された扉。他のものとは違って大きい。いかにもラスボスというかんじである。

(開けたらそこには魔王がいました、とか?)

《それがいいのか?》

「いや、言っとけばこう、フラグ回避できるかなーと」

《それがまさにフラグを立てる行為じゃないのか?》

「……………あ」

声を出すと隊長に睨まれる梓。どうやらここから先は黙っていた方がいらしい。確かに扉の左右に控えている兵士たちはさつきまですれ違っていた兵士と雰囲気が違う感じがしないこともない。

扉が音をたてて開いていく。そしてその扉の向こうにあったのは

「えーと、成金趣味?」

言った後から慌てて口を閉じたが、小声であったためか誰にも聞かれなかったようではっきりとして首を動かさないようにして辺りを見る。

まずは、扉からまっすぐ、この部屋の主の座る椅子へ向かって伸びている赤絨毯。テレビ越しでしか見たことのないそれにただただ驚いた。

床は何かの石だろうか、きれいに磨かれたそれはつやをもって光っている。そして壁、柱、天井が光っている。電球とかではなくて装飾で。金で装飾されていてきれいとかすごいとか言う前に目が痛い。目に痛いの方が正しいだろうか。

こんなところにいる人はどんなのだらうと思っていると前方の椅

子から声がした。あたりをきよるきよると見ていた梓は言葉を理解できなかったがそちらを向く。なんとなくだが怒られた気がしたのでそのまま目が点になったような錯覚を覚えた。

あまりにも『それらしい』人物がいたのだから。

一言で言うなら『豚』。もつと詳しく言うなら『昔からやりたい放題して育ってきた一人称が僕で、役立たずの貴族のお坊っちゃん』がいた。ぶくつと膨らんだ顔が動いているのと声が聞こえることから喋っているのがそいつだとわかるが、どう見てもポジションがおかしい気がした。

(こういうのはさあ、もつと精悍な顔つきのかっこいい人がいるものだと思うんだけど……)

さすがにハルもコメントしづらかったのか梓のその思考には何の返答も無かった。

ちなみにこの椅子に座っている人物は有能といわれている帝なのだが、梓には偉い、ということしか分からなかった。

梓がそんなことを考えているとき。

(いつ見ても趣味の悪い部屋だ)

朱旺はそんなことを思っていた。されど、そう思いながらも顔をしかめることなく言われた通りに前へと進み出る朱旺。

前にいる巨体にも嫌悪感があるもののそれを周りに悟られないように取り繕って一礼する。こんな巨体でもこの国の頂点、帝なのだから。そしてこんな巨体でも有能なのだ。

「この度はご苦労であった」

「おほめいただき光栄でございます」

「して、成果のほどは？」

「これといって『仮面』との繋がりを見つけることはできませんでした」

「そうか。して、後ろの娘は何だ？」

言外になぜこんな小娘がここにいるのか、と言っているのだろう。ありすぎる肉によって小さくなった目をさらに細めて帝は朱旺を見た。朱旺はしぶしぶながら説明を始めた。

「この度の遠征に行つた先に突如現れた娘であります。衣服はこの国のものと違つておりますし、言葉が通じぬため西の国者ではないかと思ひ帝の指示を頂きたくこの場へつれて参りました」

朱旺は帝に『魔法が効かない』ということと言わなかった。なぜかと問われたら少女がかわいそうだと思つたと答えるのかもしれない。かつた。

近頃『仮面』に対して不必要に過敏になつてゐる帝がその事を知つたら。最近その疑いをかけられた者は全員が死んでゐる。彼女にも間違いなく処刑命令が出されるだろうと思つたからだ。

大きく頷く帝。実際は首回りの肉に邪魔されて『大きく』ではないが、本人にとっては大きくである。

「今年もそろそろあの季節。そろそろ着くと連絡を受けておる」

「では……」

「うむ、渡せ」

毎年この時期にやつて来る西の特使に少女を渡すということになり、退出を命じられた朱旺は少女を連れて出ていこうとする。

内心はほつとしている。一刻も早くこの趣味の悪い部屋から出て行きたかった。

しかしそれは一人の役人によって阻まれる。

「お待ちください!!」

扉が開き、やって来た役人が乱入の非礼を詫びながら帝に何かを耳打ちする。それを聞いている帝の顔がどんどん赤くなっていく。そして、体を揺らすと朱旺を怒鳴りつけた。揺らすだけで立ち上がることはしなかったようだ。

「貴様、その娘に魔法が効かぬことを黙っておったな!!」

（ちつ。今のやつ告げ口したな）

「答えぬか!!」

内心の苛立ちを抑え、返答すると少女を処刑するとわめき出す帝。周りもその雰囲気になってきており、護衛兵が二人を囲んでいた。扉が閉まる音を聞きながら朱旺は思う。

（ああ、誰か助けに来ないだろうか）

たとえばもうすぐやってくるはずである西の特使。

それなりに仲がよい彼女なら助けてくれるのではないだろうか。

一方の梓は危機感を感じつつも違うことを考えていた。というかハルと話し合っていた。

《いやいや、あれはあれだな。本当は立ち上がりたかったけど重く

て立てなかったってやつだろうな》

(ああー、同感)

あの帝の巨体についてである。どうやればあんな風になるのかから始まり、帝の動作一つ一つに突っ込んでいくという面倒でもいい暇潰しである。

無事に終わったと思ったけど、この流れが良くないのは梓にもわかった。帝の顔が怒っている。いや、真ッ赤になってることしか分からないが。

「あ、これって、詰んだ？」

《ほら、さっきあんなフラグ立てるからだ》

「いやいや。あれは魔王が出てくるっていうフラグであって……。まさかこの成金デブが魔王？」

《は？》

「こんな金ぴかなところにいるとは予想斜め上を……。もっと暗くてじめじめしたところにいると思ってた」

《え？ あの、もしもーし》

「魔王が相手なら私には勝つことができない！！」

《てか、普通の人にも勝てないよな》

「とまあ、ちょっとふざけたところで」

《こんなときにふざけるなよ……》

前にいる帝は怒り狂っていた。座っていたはずなのに立ち上がっている。それだけ腹が立ったということだ。理由は梓が勝手に喋っていたからだが、当の本人は知るわけもない。

「どうしよう。このままじゃ、晒し首だ。いや、その前に国中を馬車で引きずられて見せ物にされる」

《こいつの怒り、明らかお前に向いてるよな。何かしたのか？》

「まさか！ 日々平穩に過ごすことが私の目標だよ？ そんなバーテンドー服に喧嘩売るような行為をわざわざするわけがないでしょ」

《バーテンドー服？ まあいいけど。》

「それとも、私の知らないところで負のスパイラルが起きててめぐりめぐって私に！？」

《異世界にまで影響を及ぼすとしたらたいした負のスパイラルだな》

梓も隊長と同じように助けが来ないだろうかと期待していた。

そして、その期待に応えるように扉が動く。その場にいる全員が顔が扉の方に向く。そこに梓は見た。

梓とそう年の変わらないであろう少女がそこにいるのを。

時は少しばかりさかのぼる。場所は梓がはじめに馬車に乗ってやってきた門のところに、一台の馬車が到着する。馬車から降り、去っていく馬車を見送った少女はそのまま門の番のがいるであろう詰め所へと軽やかな足取りで歩いていく。

短いスカート。半そでのブラウスに、えんじ色のネクタイという服装の少女は、臆することなく進んでいく。

「こんにちはわー」

少女は詰め所で目的を話す。荷物が結構多いので持ってきてくれる人と呼んでもらい、慣れた様子で中へと入っていく。

よどみなく歩いていった先は大きく豪華な扉の前。

入ろうとしたところで、扉の左右にいる兵士に声をかけられる。

「お前は何者だ」

「いま、帝は大変お忙しい。今は帰り、また来い」

今この部屋の中では梓がピンチに陥っている。

扉の前に立っている少女はまったく動かないが、やがて二人の兵士の制止をまったく気にせずに扉を開けようとした。

それに二人の兵士は反応し、力でねじ伏せようとした。見た目はただの少女。大の男二人でかかれば何の問題もなく、追い返すことができるだろう。

「眠れ」

少女は一切あわずに一言だけ言った。

直後、少女に向かう勢いそのまま前進し、そのまま床に崩れ落ちる二人の兵士。

少女は自分を止める者がほかにいないことを確認してからゆっくりと扉を開けた。

大きさに反して軽い扉が開くと、そこでは帝が怒り狂い、何人も護衛兵が誰かを取り囲んでいた。



## 救いは高校生

何かを話し出す、突然やって来た少女と豚。豚は怒りながら、対する少女は冷静にかつ真剣に豚と対峙しているように梓には見えた。梓には理解できないが、その内容とは以下のものである。

「今年も参りましたが、何やら変な状況ですね」

乱入してきた少女が梓を見る。そして隣にいる隊長を見る。帝は突然の訪問に怒っている。

「なぜ、やってきた？ 西の特使よ。我は誰も入れぬようと命令したような気がするが」

「そうでしたか。失礼いたしました。ですが、この扉の前に立っていた人たちは悪くはありません」

真剣な口調はそのまま少女はにっこりと笑った。

「あたしは理由もなく帰れと言われたのが気に入らなかったの、その理由を聞こうと無理矢理入ってきただけです」

扉の外の人たちでしたら、あまりにも邪魔が激しかったのでちよつとばかり寝てもらいました。そう言っただけで広間の中へと入っていく少女。彼女を止めるものはおらず、その足は兵士たちに囲まれていく梓たちのところで止まった。

「それで、これはどのような状況なのでしょう」

梓を指しながらまっすぐ豚を見据えて言い切る少女。

一方、当の梓はと言うと……。

何が起きているのかが全く理解できずにただただ呆然としていた。単純に突然入ってきた少女に驚いただけなのだが、その少女が豚相手にあまりにも普通に話していることにも驚いたのだ。

(とうとうか、目の前の人、誰？ 何を話してんの？)

あまりの急展開についていけず、ゆっくりと深呼吸する間もなくあつたことをまとめることにした。

一つ、自分はハルとかいう神様に巻き込まれて異世界であるこの世界にきた。

一つ、ついた先はなぜか戦場で、梓は敵だと思われたらしくここまで手足を拘束されて連れてこられた。

一つ、なにやら偉い人(おそらくこの国のトップであろう人)のところへ連れてこられた。

一つ、その偉い人は豚だった。

(あ、これはどうでもいいな……)

で、なにやら殺されそうになってちょっとパニックになってたら梓と同じ年くらいの少女が現れて豚と話し始めた。

(すごいねー。帰ったら自慢できるよ?)

《誰も信じないだろうけどな。てかどうやってたら帰れるんだよ》

「それはもちろん、あんたが返してくれるんじゃないの？ だって

連れてきてくれたし」

《おまつ、それはだいぶ前に無理だって言っただろうが！！ 他の神でも探すんじゃないのかよ》

「じゃあ、他の神の居場所でも探してよ。ほら、レーダーみたいに  
な」

《無、理！！》

「本当に役立たず！！ ……あ」

考え事から一転、ハルとの口論をしていた梓は自分に注がれている少女と豚の視線に気付いた。見ているというレベルを超えて梓を凝視している少女。その色は不振や不安というよりも驚きが強いように感じた。

「どうやら、訛りが強いみたいですけど西の国の言葉ですね」

少女はとてつもなくほっとしていた。彼女は西の国の人です、と言ったもののその自信はほとんどなかったからだ。

目の前に座っているこの国の帝は、彼は兵士に囲まれている、自分と同じくらいの年頃の少女を喋らせて言葉を確認しろと言ったのだが、言葉が通じていると思っていなかった（言葉が通じるならはじめに命乞いをしてきそうな状況だったので）のだ。それなのに喋って、と彼女に言ったタイミングで喋りだしてくれたのだから。

そして、ほっとした反面あせった。なぜなら彼女の喋った言葉はこの世界のものではなかったからだ。少女の国の言葉でないと気づかれては、困る。

少女は自分の出自と被るような彼女をこのまま帝に渡すのは嫌だったのだ。

「訛りが強かったので西の国の言葉に通じていらっしやるあなたにもわからなかったみたいですね」

「そうか、のう?」

首をかしげる帝。それはそうだろう。訛りで片付けられるか微妙だとは少女自身も感じているのだ。ましてや彼女が異世界の人間だとわかった今、とりあえず少女の知り合いのもとへと連れて行かねばならない。なので、この話し合いをさっさと終わらせようとする。

「では、国につれて帰って身元を確認するので連れて行きますね」

彼女の腕をつかみ、無理やり彼女を兵士の中から連れ出そうとする少女を帝が制止する。

「待て!! そやつは『仮面』とのつながりが疑われておる。それをむざむざ国の外へ連れて行かせるわけには行かぬ!」

「……そうですか。では、どうしたらいいでしょう?」

帝にしてみればここ最近追い続けている『仮面』の唯一の手がかりだろう。実際は全く関係ないというのに……。少女も関係ないのはわかったが、ここで帝ともめるのはよくない。

少女の家からの命令で帝の機嫌はなるべく損ねないようにとわわっているのだ。

少女としては帝に妥協案を出せという意味を込めて足を止めた。

「本来ならば牢屋行きなのだが……。なればお前がこやつを見張ってくれぬか?」

「見張り、ですか」

「そう。見張っている間に仮面が事件を起こせばこやつは無罪ということであろう? 西の者かも知れぬということも考慮してお前に

それを任せようではないか」

それは逆に好都合だと思った少女は快く承諾する。では、とお辞儀をして扉から出て行く。もちろん彼女をつれてだ。

帝はぶくぶく太った腕を持ち上げて振り下ろした。その見た目にふさわしくこぶしを振り下ろした音ではなく肉の揺れる音が聞こえる。帝は怒りによって顔を紅く染めていた。

「くそつ！！ あの小娘め。西の者だと少し丁重に扱っただけで調子に乗りおつて！！」

小娘、とは彼女を連れて行った少女のことだろう。腕を何度も振り回し、怒りをぶつけ続ける。

「くそつ。くそつ。全く持って気に入らん。こうなったら何かの理由をつけて連行してこねばならぬ……」

彼女を手元に取り戻すために考えを広げ始める帝。すっかり忘れられている隊長と兵士は交わす言葉も少なく、隊長は退出し兵士は元の定位置へと戻っていった。

退出した先には先ほどの少女がいた。どうやら自己紹介をしているらしく、自身を指差して名乗っていた。

「これはこれは特使殿。こんなことをこんな場所でなさらなくてもいいのでは？」

「ああ、朱旺さんですか。わざわざそんな他人行儀にならなくてもいいんですよ？ とりあえず、先日の遠征は大成功だと聞いています。それに梓を見つけたのもあなただとか」

「梓？」

「彼女の名前ですよ」

はじめの質問に答えないのは、そんなことを聞くなという意思の表れなのだろう。隊長に喋らせる暇を与えずに梓と出会った状況や、これまでの梓の行動についてを聞いて少女は皇居の外へと向かって梓の手を引いて歩いていった。

「しかし、言葉が分かるのですか。さすが特使殿ですね」  
「特使殿、というのはやめてください」

少女は言葉は分かるのが半分。分からないのが半分くらいだと答えた。今度は梓を連れて個人的に朱旺をたずねることを伝える。朱旺は非番の日を教えて、これからどうするのかとたずねた。

「とりあえずは宿に行きます。宿はいつもの宿のいつもの部屋ですから。何かの情報をくれるんなら大歓迎です。梓のことを心配してきてくれても歓迎しましょう」

そう、言い残して。

残された隊長は苦笑してから皇居から出ていった。今日は早く寝よう。そして明日からまたがんばろう、そう思いながら。

## 観光気分で町へと繰り出す

何が何やらわからないうちに宮殿から引きずり出された。引きずり出した張本人である梓と同年程度の少女はスズと名乗っていた。それ以外にも何かを言っていたのだが残念なことにそれは梓には通じなかった。とりあえず、梓はスズの名前を知ることができたし、梓も名乗ったのでスズの方も梓の名前は知ったはずである。

そして今は腕を引かれながら広い道の商店街の様なところを歩いていた。石造りの家の通りに面した一階部分の壁が無く、一階部分には商品がずらりと並べられている。店の中には屋根を出し、その下にも荷物を広げている。道が広いのはこういう店への対応だろうか。

どこに行くのかという問いには答えてもらえず、通じていないと思ったのでスズには何も言わず、この場に至るまでずっとどこに行くのかとハルと議論を繰り返していた。道行く人に凝視されていたが梓は気付いてはいなかった。

店の品も幅広く、野菜を売っているところもあれば雑貨を売っているところもあるし、中には宝飾品を無造作に広げて販売していたりもする。

(泥棒はいないのかな)

《いや、違うね。どこの店も境界線作るみたいにして結界を張っている》

「へえ」

梓にはわからなかったけれどハルにはわかるらしい。そのことがなんとなく面白くなかったのか顔が渋い。

《金を払ってない商品が結界を越えると持つてる人間に何がしかの

魔法が働くようになってるんだろっな」

「魔法ってそんな地味に使えるものなんだ」

魔法というもつと派手なイメージがあつた梓はそう言った。例えばはじめてこの世界に来たときに使われたああいう魔法とか、ありとあらゆるものが燃えるような炎とか、広い範囲が凍りつくようなものとかである。

「ちなみにこの手の結界で一番使われるのは電撃な。怪我をさせるんじゃないかって気絶させれば捕まえるのが楽だからな」

「詳しいね」

「俺のいたところでも普通に使っていた方法だからな。たいていのやつが対策を立てていたせいで普通に万引きとかあつたけど」

「うわー。なんていうか、意味ないんだね……」

「まあ、形としてはあるって感じだな」

そして梓はハルとの会話をやめて周りを見た。異世界だけあつて、自分の世界では見たことのないようなものもいくつかある。

それは服飾よりも食品によく見られた。中にはとてもじゃないが受け付けられないような見た目をしているものもあった。

「でも、あの果物とかおいしそう」

梓が見ていたのは八百屋のように果物や野菜が並べられている店の一番前に並べられている物だった。つやを持っている物で、リンゴのようだ。

腕を引っ張っていたスズは梓のスピードが遅くなったのに気づき、梓の視線を追った。何を見ているのか気づいたスズは梓の手を引いたままその八百屋へ行って、梓が見ていた果物を買った。そしてそれを梓に渡す。



「え？ いいの？」

いいよというように皮ごとかぶりつくスズ。それを見て安心したのか梓もおずおずと一口食べた。

「おいしい……」

見た目はリンゴだけど味は桃に近いというか、香りが桃で味がリンゴというか、とにかくおいしかったのだ。スズは食べながら歩き出した。まだ梓の手を握ったままだ。

手を離されてもスズから離れる気はないが、人が多いのではぐれたら困る、と思った梓は手を握られたままでも文句を言うことはなかった。

商店街を過ぎ、一軒の家の中に入っていくスズ。宿のようで、スズが入った一室にはベッドが置いてあった。四階建ての一番上の角部屋で調度品の質などはわからないけれどもいいものだろうか。ベッドが置いてある部屋と、リビングのような部屋は薄い障子戸によって仕切られているが、今はその戸は開いている。いい感じに風が吹き抜けていき、それだけで落ち着ける。

スズはソファにすわり、テーブルを挟んで向かい側のソファを指差して梓にも座るようにとジェスチャーで示してきた。おとなしく座ると今度はテーブルの上のお菓子を勧められた。

「おいしい……」

遠慮しつつ食べているとお茶が目の前に出てきた、どうやらスズが淹れてくれたらしい。そのお茶もいい香りがしておいしかった。

食べ終わると急に眠気が襲ってきた。ずっと振り回されていて疲れたのだろーと思いきその眠気に逆らわず、そのままぶたを閉じた。

わずかに聞こえてきた人の声に目を覚ました。

「よく、寝た？」

《なんで疑問系？》

「寝たって感じがしないから」

《そうとうよく寝てたってことじゃね？》

「じゃあ、そういうことにしておこう」

眩しさに目を凝らすとそこはおそらく昨日、スズに連れてこられた部屋のソファの上だった。お菓子のゴミがあったことで昨日のことをぼんやりと思い出しながら考える。ハルに意見を求めるつもりだった。

「あの人、スズさんだっけ。どう思う？」

《俺に意見を聞くんなんてはじめてじゃね？ まあ、いいや。で、あのスズってやつのことだよな。俺は信用してもいいと思うぜ》

「理由は？」

《うーん、感？》

その口調から一瞬、緑の髪をした歌姫の「キラッ」という光景が頭に浮かびいらつとする梓。その苛立ちを感じ取ったのかハルが反論する。実際感なのだから仕方ないと。

「じゃあ、これからどうし……」

「あ、おはようー!!」

梓の声をさえぎってスズが部屋に入ってきた。昨日のように梓の

正面に座り、手に持っていた紙袋と紙コップをテーブルの上に置いた。

「一人にしてごめんなさい。朝ごはんにいろいろ買ってきたし、食べれそうな選んでね」

見た目に受け付けられないものはなかったのでパンの類を三つ選び、オレンジジュースのような色をした飲み物を受け取った。

「ありがとうございます」

「どういたしまして。昨日のお茶に薬入れすぎたかと不安になってたところだったから不安だったんだー」

あからさまにほっとした感じのスズに苦笑しつつ朝ごはんを食べる。先ほどの発言に変な言葉が混じっていた気がしたけれど、聞き間違いだろうと思った梓はすべてを食べ終わり、ほっと一息ついたところで気付いた。

スズが自分と会話をしているということに。

確か、昨日はジェスチャーを利用してははずだし、自己紹介程度しかしていないはず。その自己紹介も名前だけでそれ以外は何も話していない。スズの言葉を梓が理解できなかったからだ。

「あの……言葉……」

「これはあたしの特技なの。『いかなる言語であろうと理解できる』っていうもので、特技って言うよりかは能力って言ったほうが正しいらしいけど」

「はあ」

「あ、でも、これってあたしにしかできないみたいなの。あなたの言葉は昨日の市で喋ってたので大体理解できたよ。前に聞いたことがあるタイプだったからすぐに理解できてよかったよ」

話せないって気まずいもん、と言って梓を見るスズ。どうやら梓の目の前に座っているスズという少女は異世界という現実とは思えない世界でもさらに非常識と言える存在だったようだ。

「あの、訊いていいですか？」

「何を？」

「私がこれからどうなるのかを」

言葉が通じるならばと梓はスズに質問した。だがスズは期待した答えを返さずに、立ち上がった。

「とりあえず、あたしの用事もあるし、これから外に出るから。道すがらにいろいろ教えてあげるし、あなた退いた世界のこととかもいろいろと教えてくれるとうれしいな。あと敬語は使う必要はないからね」

梓がこの世界の情報を手に入れるのはまだまだ先のようだった。

「あ、そうそう、ここじゃあ迷子になってもアナウンスとかかけられないから」

「迷子になんてなりませんよ!!」

## 説明会は街中で

宿の外に出ると小さな屋台が出ていた。

「あ、おじさん。その杏アイスを二つ」

前を歩くスズがおじさんからアイスを受け取り、梓に渡した。一口食べたそれは気持ちのいい冷たさを体に伝える。おいしい、と感想を言うとハルに昨日からその感想ばかりだと言われた。

「おいしいんだから仕方ないじゃない」

そう言つとあきれられたがそうとしか言えないのだから仕方がない。

「ところで、スズ、さん」

「ん？」

「あなたは、どうして私が異世界人だと？」

「言葉だよ。だってあたしにしかわからなかったみたいだし」

「そこ」

「へ？ ……ああ、どうしてわかったかってこと？」

梓の指摘していることに気付いたスズは気まずそうに昔、連れられたことがあるからとだけ答えた。使っていない言語ではあったが記憶にあれば理解できるとも付け加えた。

なんとなくだが思い出さたくないことでもあるような顔である。

「連れて行ってくれた人は、いろいろと勉強になるからって。確かに勉強にはなつたと思うけど」

「連れて、てことは私、帰れるんですか？」  
「まあ、その人に頼めばね」

さっさとアイスを食べってしまったスズはそのまま別の店に入り、今度はドライフルーツを買ってくる。これを食べながら歩き出す。ついておいでと言われついていく、というかここでスズとはぐれるとどうなるかわからないという不安が大きかったりする。

道中、聞きたいことがあるれば何でも聞いてと言われたのでいろいろと聞いていくつもりだ。

「でもその前に」  
「？」

急に指をさされて驚くよりも不思議に思う様。何か無作法でも働いてしまっただろうか。

「時々、誰と話してるの？」

「え？ ハルですよ。私をここに連れてきた」

「結局、敬語で通すんだね。それはちよつと残念だけど……。じゃなくてハルって誰？」

「だから私をここに連れてきた自称神様ですよ」

《自称は余計だ》

突然何を聞いてくるのかと思ったがたいしたことではなかった。むしろどうでもいいことだった気もしないではないが、梓はハルのことを話した。

ハルの突っ込みにほら、声が聞こえたでしょう、とスズに言ったが、スズは聞こえないと返した。

何度かハルに喋らせてみたがやはり聞こえないと言われる。

「それ、多分、梓にしか聞こえてないような気がするよ？ だから声を出して会話しない方がいいと思うよ。まあ、あたしはそのおかげで言葉がわかったんだけどねー」

「え、と。じゃあ私は今まで周りから大きな声で何か喋ってる人に見えてたと？」

「そうみたい」

道理で、自分が喋ると周りがびっくりしたはずだと納得したものの、相当恥ずかしいことになっていたと気付き、穴があったら入りたくなる梓。それを横目に今度はジュースを購入するスズ。ずっと口に物を入れているが、結構な量である。朝ごはんもしっかり食べていたし、いったいどこに入っているのだろうか。

「……今度からは気をつけよう。そうしよう」

「ま、とりあえず飲みなよ」

「ありがとうございます。ところで、ここってどこなんですか？」

「それは、この世界における『どこか』ってことでいいの？」

「はい」

その質問にスズは丁寧に答える。

まず、この世界には海を挟んで二つの大陸が存在していてそれぞれの大陸に一つずつ、二つの国が存在していること。二つの国には特に国名はなく、西にある方を『西の国』。同じように東にある国を『東の国』と呼んでいること。今、梓たちがいるのは東の国の首都であること。スズは西の国の人であること。

「ここまでで質問は？」

「昨日いたところってどんなところだったんですか？」

「ああ、ちよっと待って」

スズはこれとこれくださいと注文して、受け取ると質問に答えながら歩き出した。店員はわけのわからない言葉で話す二人を不気味そうに見ながらも、営業スマイルで礼をして、見送った。

「あそこはこつちの 東の国のことね 王様、帝って呼ばれている一族が住んでいるところで、政治の中心地でもあるの。昨日、梓が出会ったあの太った人が今の帝様」

再び頭を抱えなくなった梓。というよりか崩れ落ちそうな気分であった。まさかよりによつてそんな人と会っていたとは。しかもものすごく怒っていた。目をつけられたのではと不安になる。

《うわー。やっちゃまったな》

(今はしばらく黙つてて)

今はハルの茶化すような言葉が邪魔だったので、しばらく黙っているようにと書いてスズとの話に戻る。

「じゃ、じゃあ。私は何であの人と会うことになったんでしょうか」

「それは……多分だけど、梓って魔法が効かない？」

「そうハルが言っていましたけど」

それを聞いて驚くよりも、どちらかというときれいなような、さらに言うところ愁傷様のような顔をしてスズが言った。

「あのね、今この国には一つの犯罪集団がいるのよ。たぶん今の政治に賛同できない連中の集まりなんだけどね」

なんとなく次に言うことがわかったけれど信じたくないの口にしない梓。



「その集団の特徴として『魔法が効かない』っていうのがあるの……」

気まずい沈黙。気まずすぎる沈黙であった。

二人とも足を止めてしまふ。その場所はちょうど昨日通った商店街の道。その道を行く人たちが動かない二人を迷惑そうに見ては去っていく。

「多分、あの人は梓がそれに関係していると思ったんだと思うの。最近手を焼いているって聞いていたからなんとしても梓から仲間のことを聞き出したかったんだとも思うよ。何も言わなかったらそのまま死刑になつてたのかも」

「つ、つまり……」

冷や汗とわかる汗が流れるのを感じつつ梓が確認する。

「昨日、スズさんがいなかったら、今頃私は……その、死んでいた？」

無言で首を縦に振り首肯するスズ。気絶しなかった自分を褒め称えたいと思った。

「でも、あの人も感謝しないといけないね」

「誰のことですか？」

「梓と一緒に帝に会ってた人。朱旺っていうんだけどね」

朱旺という人物の名前を聞いても誰かは分からない。そう返すとスズは帝と一緒に会っていた人だと教えてくれた。

隊長さんのことか、と言うと。そうそう、と返事が来る。突っ立

っている。と邪魔だから歩こう、と手を引かれる。そのスズの手にはいつの間にかお菓子の入った紙袋が。

「食べる？」

「いえ、それよりも何で感謝？」

「あの人、黙っててくれてたの。梓に魔法が効かないってことをね」「そうだったんですか」

「で、食べる？」

一度断ったお菓子をもう一度勧められる。今度は礼を言って受け取りおいしくいただいた。

(今度あの隊長に会ったらお礼が言いたいなあ)

《いつ会えるんだ？》

(うーん……)

実は隊長も帝側の、つまり梓の見方ではない人物かと疑っていたので、避けていたがまさかそんな風に扱われていたとは思ってもしなかった梓はもう一度、隊長に会えないかと考えた。

隊長、朱旺に今までのお礼を言いたいと思ったのだが、いかにせん彼の居場所はおそらく帝がいたあそこであろう。梓にとっては近寄りたくない場所である。

「スズさん。その朱旺さんともう一度会うことってできませんか？」

前を歩くスズが足を止めた。場所は商店街の端っこに向かっていくせいか人はいないので迷惑になることはなかった。

「会いたいの？」

「まあ、お礼を言いたいなと思ひまして」

「ちょっと難しいかもね」

仕事場、つまりは皇居以外では朱旺とは会ったことがないとスズは言った。

自宅の場所も知っているらしいが、休みの日以外は夜遅くならないと帰ってこないし、朝早くに出て行くらしい。下手をすると仕事場で寝泊りするらしく、家にいないことのほうが多いらしい。

そして、その仕事場は皇居であり、そう簡単に入れない場所である。

「会えそうにないですね」

「でしょ?」

そこで話を終わらせてスズはまた歩き出した。目的地はそう遠くないらしい。

## 目的はおつかい

商店街から離れていくと、少しずつではあるが道を歩く人の雰囲気が変わっていく。買い物籠を持っている人や、売り物を運ぶ人がいなくなり、変わりというかんじに何かの職人のような格好をした人が多くなる。

スズにたずねると、ここは工場と呼ばれるところらしい。梓の記憶にある工場と違うのだが、ここは専門の職人の店が集中していることからそう呼ばれているらしい。

重そうな金属の塊を運んでいたり、どこかの弟子のような感じの子供があちこちの店に出入りしている。弟子の方は手にメモを持っている。どうやら何かの注文だろう。ここはさまざまな店が協力し合って成り立っているらしい。

その中の一軒、白い暖簾がかかった建物の中に入っていくスズ。

「外で待っていてもいいけど、どうする？」

「あ、一緒に行きます」

あたりを珍しげに見ていた梓に、スズはそう言った。治安は悪くないからあたりを見て回っても大丈夫だとも言った。しかし、言葉が通じないという事が不安すぎてスズと一緒に店の中に入ることを梓は選んだ。

「うわあ……」

中には紙があつた。色、大きさ、厚さで分類されているようでもさまざまな種類のものがある。店自体はあまり広くない。しかし、その広くない空間には所狭しと紙が並べられていた。

店の中には青年がいて梓たちを出迎えてくれた。スズいわく、こ

の店で修行をしている人たちが当番制で店番をしているのだそうだ。

「破かない限りは触っても大丈夫だよ。あたしはちょっと店の人と話してるから、待っててね」

「はい」

スズは店の奥へと入っていった。

残された梓はとりあえず手近なところにある紙に触れてみる。画用紙のような紙だった。横にある物は手触りが違っただし、入り口から遠くなるにつれて紙は薄くなっているようだった。

安易な気持ちでやってきた客が適当に触って破らないようにという配慮である。青年が不安そうに見守る中、梓は慎重におそらく一番薄いだろう紙を見たくて紙を持ち上げる。

「これとか、向こう側が透けて見えるし……。何に使うんだろう」  
《そんなこと聞かれても困るんだけどな》

何気なくつぶやいた梓に返答してきたハルに、あ、いたんだ、と返そうとして先ほどスズに言われたことを思い出す。ハルの声は他の人には聞こえていない。

（あ、いたんだ）

《それはひどいな！ 俺とお前は今、一心同体なんだよ》

（それは気持ち悪い）

《……。まあそれは置いて。その馬鹿みたいに薄い紙の使用用途はわからないけど、そこから三つ入り口よりの、一番上においてある紙なら何に使うかわかるぞ》

その場所においてある紙は、七夕に使う短冊のような形に切られていた。習字紙のようなさわり心地だが、習字紙よりも厚く、しっ

かりとしている。一枚手にとってみる。他の紙と何も変わらない感じなのにどうしてハルはこの紙の使い道だけわかるのだろうか。

《それは、『符』に使うものだな》

(『符』?)

《えーと、ファンタジー風に言うとな……陰陽師が使うようなやつだよ》

「うっそ!! じゃあ式神とか召喚できちゃうの!?!」

思わず声が出てしまって、口をふさぐジェスチャーをしてあたりを見回す。どうやら他に人はいなかったようだ。スズもまだ店の奥から戻ってきていない。

今、ハルは陰陽師が使うような物だと言った。つまり、これを使うことができれば……と希望を膨らませる梓にハルは、無理と言ってくる。

「無理ってどういう……」

《声》

(あ。それは置いといて、どうして無理なのよ。けっこうそういうの夢に見てたのに)

《書くのに使うものは何でもいいんだけどな、式神召喚だったり魔法を使うのに使おうと思ったらそれ相応の文字やら陣を書かないといけないんだよ。お前、書ける?》

(……書けない)

《だろ? あ、あと書くものは何でもいいって言ったけど、人によつては自分の血をインクに溶かして使ったりするらしい。インクに溶かさないで使うやつもいるらしい。何でもその方がより力を込められるとか》

さすが自称神様、詳しい。自分には使えないことへのショックは

小さくはなかったが、よくわかる解説だった。しかし、その解説を聞いたうえで血を使うということに軽く引いた。理由はわからないでもないが痛そうである。

符に使う紙は普通の紙とは材料が違っているため、区別をつけやすいそうだ。だからハルでも分かったらしい。

その辺は世界が変わっても変わらないのかと思いつながら、符に使う紙を戻したところでスズが店の奥から戻ってきた。手に持っているのはこの店の品揃えからして当然のように紙だった。しかしそのサイズがおかしかった。とてつもなく長いのだ。触ってみると先ほどまで梓が触っていた紙のようだ。

「それって符を作るのに使う紙ですよ」

「うん。よく分かったね。これだけあると五百枚くらい作れるんだって」

「そんなにですか!？」

「あたしは符を使わないから、よくわかんないんだけどね」

「え？ スズさんの買い物じゃないんですか？」

「毎年こつちに来た時に頼まれる買い物なの」

頼んだ当人はこつちに来るのを面倒がってるから、毎年あたしが来るときに買ってくるように頼むんだよ。

苦笑しながらそう言つて、一緒に店の奥から出てきた白髪交じりの老人と楽しそうに話し、お金を払って店を出る。おそらく、この老人がこの店の店主にして、ここの紙を作る職人なのだろう。

暖簾の外に出れば、店番の青年と老人が丁寧に頭を下げて見送ってくれた。言葉は通じなかったが明るい、やさしい雰囲気な店だったと梓は思った。

そのことをスズにいうと、この辺は人と人とのつながりが他よりも強いのだと教えられた。工場には工場のルールがあり、それを破らない限りはやさしく接してくれるのだとも。

「でも、よく符なんて知っていたね」

「ハルが教えてくれたんです」

「物知りなんだね。符に使う紙は自作できるけれどこの店の職人の作った紙が一番いいんだって」

だから一度にこんなに買うんだって、と言って紙を担ぎなおした。五百枚の符を作ることができる量の紙である。なかなかの重さがあるだろうにスズはあまり気にしていないようだ。

話を聞くに魔法を使って軽くしているらしい。便利だ、魔法。そう思ったが梓は使えないことを思い出しもどかしくなった。

「悪いけど、一度宿に戻ってもいい？ これを持ったまま他の所に行きたくないの。邪魔だし」

「全然構いませんよ」

重さは気にならないが、やはり邪魔だったらしい。スズの提案を受け入れて再び人でにぎわう商店街へと戻っていった。商店街は今も変わらない賑わいを見せている。この商店街が静かになるなんてことがあるのだろうか。

いろいろ食べていたので腹具合からはよくわからないが、日の高さからしてそろそろ昼だろうか。二人は出かけた時よりも少し早足で宿へと戻っていった。



## 本来の目的は？

その後も頼まれたという、武器や保存食の類を買い込んでその日は夜を迎え、この世界に来てから一番落ち着いた、一番安心して寝れた夜をすごした次の日。

「スズさん」

「なに？」

「ここって、一昨日、私たちがあつた場所ですよ」

「そうだよ」

二人は再び皇居の前に立っていた。スズについて行くしかないとはいえ、こうなることがわかっていたら来なかつたのに、と思いつながらも、宿に一人にいるのも不安であるということに気づいてため息をついた。結局はスズについていくしかなかったのだ。

服装はここで始めて会ったときと同じ。梓は異世界から来たときにきていた学校の制服。スズも学校の制服だそう。なんでも中等部のもので夏休みが終わつたら高等部に進学するのだと教えてくれた。

それはさておいて、スズは用件を門番に伝えて中に入る。しっかりと梓の手を握っているのは梓が迷子にならないようにという配慮だろうか。

「今日は、どうしてここに？」

「会いたいつていう人がいるの」

誰が、誰にというのがよくわからない返答であつたが、スズの嫌そうな顔を見る限り相手が、スズに会いたい、で間違いはないだろう。回りを見ると多くの猫がいた。前に来たときは全く見なかつた

が、今は猫がどこにでもいる。平然と廊下を通っていくのもいれば、陽のあたるところで昼寝をしている猫もいる。

猫のほうが堂々としすぎていて、廊下を歩く役人のほうが遠慮しているようだ。

(なぜに、猫?)

「あ、そうだ。ここにはいっぱい猫がいるけど苦手だったりする?」

「いえ、大丈夫ですけど。でも、どうして?」

心の中を読まれたわけではないだろうが見事なタイミングで声をかけられたので聞いてみた。

まるで猫のためにあるような状態なのだ。不思議で仕方がなかった。

「当代帝が、ああ、一昨日に梓が会ったあのきんきらきんのデブのことなんだけどね。ものすごい猫が好きなの。何でも、即位した直後からここに猫を飼いだしてあつという間に増えたらしいよ」

梓が帝と言われて誰かわからない、というような顔をしたのでスズは言い直した。誰かに聞かれたら即座に侮辱罪でしょっ引かれるかもしれないような発言である。しかし、周りには誰もいなかったし、いたとしてもスズは梓にわかるように、つまりは異世界の言葉で話していたのでその内容を理解できるものは誰もいなかったのだけども。

やがてたどり着いたのは左右に兵がいる扉の前。扉には見覚えがなかったのですがにあのきんきらきんに会いにきたということはなさそうであった。だとしたら誰に会いにきたのだろうか。梓が考えている目の前で、扉は開かれた。

スズが会いにきたのは感じのいい青年であった。美形である。イケ面というよりは美形と表現したくなる顔であった。

この人物に会うことに対してスズがどうして嫌がったのかはわからないが、二人ともなかなか話が盛り上がっているように見え、そこまで仲が悪いようにも見えなかった。梓とハルはそう言い合いながら時間をつぶしていた。

(部屋の感じからして、あの太った人の血縁だと思っけど)

《たぶんそうだろうな》。息子？ さすがにいとことか甥ってのはないだろうなあ》

(うーむ。いったい何が嫌だったんだろうね)

《さあ。会話内容が理解できたら分かったと思うんだけどな》  
(それは確かに)

そうして時間が過ぎ、その青年の部屋を退出してからスズにそう言つとスズはかなりげんなりしたように言った。

「あたしが毎年東（トウ）の国にくる理由の一つがあの人（ヒト）なんだけどね」

他の目的は、帝への挨拶、頼まれたものの購入なんだけどね。そう言つてスズは続けた。

「毎年来るたびに「ああ、君のその瞳の美しさに僕は心を奪われたままなのだ」やら「毎年会いにくるということは僕に気があるのだろうか？ ならば籍を入れようじゃないか」って言われたらさすがに嫌にもなるって。こっちはご機嫌とりで来てるだけだし……」

「うわあ……」

《なんていうか、ご愁傷様、だな》

「しかも帝の息子。皇太子だから、会いたいつて言われたら断れな

いし……」

《あ、俺それわかる。俺にも無駄に絡んでくるやつがいてなあ。しかも神格が貴族だから断れなくて困るんだよなあ》

やっぱり血縁だったのか、と思ったらハルがスズに同意した。なんと声をかけるべきなのだろう。スズの反応を見る限りは何も言わないほうがいいのかもしれない。ハルが言ったようにご愁傷様、としか言いようがない気がしたし、それが一番しっくりしてしまった。ついでに、今のハルの発言からどうやら神様の社会は王政または貴族政治のようだ。少なくとも上下関係にはうるさいのだろう。

上下関係による縛りがゆるい環境で育った梓にはよくわからない感覚ではあったが、二人が互いに落ち込んでいることはなんとなくわかった。

そんな梓の反応を見て、スズは肩をすくめた。

「まあ、くる理由はあんなやつでも、あたしの目的は観光だからね。これが終わればもうしばらくは自由だよ」

「もうしばらく、とは？」

正直、梓にとってはここは<sup>皇居</sup>二度と来たくない場所である。

また来ることを前提とするようなスズの物言いに眩暈がしたかと思っただ。

「もう二日、三日くらい後かな。出国前に一度挨拶に来ないといけなくてね。さすがにそのころには梓のことも疑われないようになってほしいんだけどねえ。というか、意地でも帰るけど」

夏休みの宿題もあるから、というスズ。どうやらこの世界の学生は今は夏休みらしい。

「ここで、もう二、三日。確認するけれど、船の出発もそのくらいのころのはずだから、それに乗って一週間で西の国につけるはず。向こうに話は通してあるから、そこからは転移を使つてあつという間に戻るはず。あと十日くらいかな」

と、これからの予定を梓に伝えるスズ。それまではせつかくだし、観光でもしようかと提案する。この辺の案内なら任せてほしいといわれると、さすがに梓も断れない。ありがたく受けるとスズはうれしそうに笑った。

「じゃあ、二、三日で回るためにも今から行こう!!」

「え、今からですか?」

「だって、梓がこの世界こちに来ることなんてもうないだろうから、今のうちに回らないと!!」

威勢よく言つて、梓の手を引いて走り出して数歩。走り出したスズが急に止まつて梓がつんのめつて数秒後。

「ああ、そうだ。せつかくここに来てるんだし、会えるか分からないけど行つてみよっか」

一人でうんうん、と頷いて先ほど走り出した方向とは逆の方へと歩き出したスズ。

それに困惑した表情で引つ張つていかれる梓。

「え? え? スズさん?」

《おお、新手的拉致か》

「拉致つて、え? スズさん?」

困惑した顔のままの梓の手を引つ張りながらスズは言う。

「ん？ ハルが拉致って言ったの？」

「そうですけど、じゃなくって！！」

「だーいじょうぶだって。あたしはスズの味方だから」

振り返って見せたスズの笑顔に何か寒いものを感じた梓。そう感じたのひとえにハルの先ほどの発言ゆえだと、スズの言うとおり、スズは自分の味方だと、梓は信じたかった。

## ついこの間でも久しぶり

梓はスズに手を引かれていろいろなところを歩き回った。どこでもわりと愛想良く出迎えてくれるが、ときたま露骨に嫌な顔をする人もいた。

そんな人たちの反応を一切気にせず、スズは歩いていく。部屋の一つ一つを確認しているが、どうやら目的の人物にはいまだに会えないようである。

(とうとうか、これって拉致じゃないよね……?)

《俺は拉致の方に三千点》

なぜこいつはこんなにも楽天的なんだろう。梓はハルを殴りつきたい衝動に駆られた。その怒りを感じ取ったハルは必死に弁解をする。

曰く、お前が味方だと思ったのなら味方だろうということだそうだ。確かにそう信じたい。が、先ほどの笑顔が……という気持ちである今の梓には少しばかり難しいことだった。

(それもこれもあんたの発言が原因……)

「んー。今頃は外にいるのかな？　じゃあ、あっちに行こっか」

《あー？　なんか言ったか？》

(そもそもあんたが拉致って言うから!)

「梓？」

《でもよー。なんかそれっぽかったじゃねーか》

(それでも言っつていいことと悪いことがあるでしょーが!)

「梓？」

「ひゃあ!」

スズは梓の手を引いていたがついてこようとしないことに気づいたので梓の肩をたたいた。一方の梓はスズを無視してヒートアップしていつていたため、突然のことに驚き、変な声を上げてしまった。実は声の大きさとその変な声にスズも驚いて、気まずい沈黙が流れたが、スズは気を取り直して梓を引つ張っていった。引つ張っていかれている間も梓とハルの口論が止まることはなかった。

梓はスズに袖を引つ張られ、「着いたよ」という声で意識をハルから自分の周りへと向けた。

そこはかなりの広さがあるグラウンドというべきか。鎧を着た人が声を掛け合いながら駆け足で目の前を通り過ぎていった。あるところでは槍や剣を振り回しており、またあるところでは弓をを撃ち、的当てを行っている。

「ここはこの国の兵士たちが訓練に使っている場所なんだよ」

「そんな場所に入ってもいいんですか？」

「許可はもらってるの。だから問題はないはずだけど」

本当のところは帝が仕方なしに許可を出したのであり、本当は出したくなかったのだ。西の国の特使であるスズの願いをあつさり却下すると外聞に響くと思つた帝が折れた形であつた。

そんなことを知るはずもない梓はあつさり納得し、あたりを眺めている。どうやら動きが派手な、剣や槍を使った模擬戦闘が気になつているようだった。見事な身のこなしは、その道の心得がない梓でもすごいということが分かり、あこがれるようなものだった。

そんな模擬戦闘も終了し、戦っていた人たちが互いに礼をしている。そこへやってきたのは一昨日まで梓と一緒にいた、例の隊長であつた。それを見つけたスズがそちらへ向けて歩いていく。



「朱旺さん」

先ほどの訓練での評価を行い、改善すべきところを説明していた朱旺は自分を呼んだ声を聞いてそちらに顔を向けた。そこにいたのは彼とは浅くはない付き合いの西の特使である少女、スズ。

評価を受けていた方の一人がスズの顔を見て、顔が引きつったのが分かった。おそらく彼女がここにいることが許せないのだろう。そういう人間は結構な数になる。本人は気づいている上で無視していると言っていた、暗い感情を含んだ視線がこの場に集まっている。

「特使殿ですか。今は手が離せませんが、急用ですか？」

「いいえ。皇太子殿下に会いに来たんですが、一緒に梓を連れてきたんです。言いたいことがあると言っていたのでよかったら時間をいただけないかと思ひまして」

「それなら、もうしばらく待っていてください。入り口の方においてくだされば後でそちらに行きますよ」

「分かりました」

スズは梓の手を引いて戻っていく。戻る際に、梓が会釈をしてくれたので朱旺も会釈を返しておいた。入り口、先ほどまで梓たちがいたところまで戻ってきてから、スズは梓に適当な段差に座るように言ったらしく、二人で仲よさそうに並んで座った。

朱旺はその後、全員の評価をきちんと言った。

「それでは、これで終了とする。これ以降は自由にしてくれ」「はっ」

その返事を聞いて、朱旺は待たせているスズたちのもとへと向かった。

「もうしばらくしたら暇になるって」

梓は、ここまで来てようやくスズに、朱旺に会いに来たんだと教えてもらった。とりあえず、なにより安心した。

ハルに言われたせいでもあるが、スズが自分の味方ではなかったのかと不安だったので、その不安が取り除かれたのは大きかった。

「あの人に会いに来たんなら教えてくれてもいいじゃないですかー」

「ごめんね、びつくりさせようと思って」

「とりあえず、拉致とかじゃなくてよかったです」

《拉致に近かったと思うけどなー》

「拉致？」

ハルの意見とスズの返事が同時になり、どちらにどう答えればいいだろうかと思った梓はあいまいに笑ってその場をごまかした。話を換えようと、新たな話題を切り出す前にスズが言う。

「しかし、いつもいつも嫌な視線だとは思っていたけど、今回は特にひどい気がする……」

「視線？」

梓の質問にスズが黙って頷く。結構、好き勝手をしているという自覚はちゃんとあるらしく、人によっては自身のことを疎ましく思っている。特にここはそういう意識が強いらしくて、視線がわずらわしいのだと、スズは梓に説明した。

今回は特にひどい、というのはおそらく梓がいるからだろうとも言った。しかし、今回の視線には嫌悪の意思以外のものを感じるとも、スズは言った。

「なんだろう。いつも向けられるのを冷氣だと言っなら、今日のこれは熱気？」

説明しがたそうに首をひねる。

梓はそもそも視線にそこまで敏感なたちではないし、視線の雰囲気など分かるわけもないので適当に頷いていた。スズは一人首をかしげており、梓は話しかけない方がいいと思い周りをきよるきよると見て朱旺が来るのを待った。

手持ち無沙汰であったせいか、朱旺がやってくるまでは結構な時間があったように感じた。スズが間に入って喋る形になった。

「梓、こちら前にちよつとだけ言ったと思うけど、朱旺さん」

スズは黙ってお辞儀をした。

『朱旺さん、こちらは梓です。覚えてますよね？』

朱旺の方も黙ったままお辞儀をした。

「あー喋りすぎて疲れたー」

宿に戻ってきて早々、スズはベッドに転がってそう言った。スズは同時通訳として梓と朱旺の間に立って喋り続けていたのだ。

はじめこそ、遠慮しあっているかのように互いに何も喋らなかつたが、何がきっかけだったのか急に会話が始まり、盛り上がったのだ。スズは途中で限界が来ていたようだったが、それでも気力で梓と朱旺の会話を取り持っていた。

「すみません。ついつい盛り上がってしまっ

「あー、気にしなくていいって。二人が意気投合できたのは良かったことだと思うからねー」

あれだけ長く通訳やってたことなかったから、それが原因だよ。ぐたつとしたままそう返されても罪悪感しか感じない。しかし、梓はなにも言わずスズの横に転がった。

「どしたの？」

「私も疲れましたし、寝ようかと」

「じゃあ、寝よっか」

まだ夕方ではあるが、二人はあっさりと眠りについた。

次の日の朝に目覚めたとき、制服のまま寝ていたスズがスカートについてしまったシワをとるのに頭を悩ませることになるのだが、それは今は関係なかった。

もしも、望んだ結末があるのなら

帝は一人、部屋で頭を抱えていた。昨日の夜にやって来た少女スズに言われたことが何度も頭の中で再生されていた。

「どうすればいいのだ……」

このままでは帝にとって気に入らない、国に害しか与えない集団《仮面》の手がかりをみすみす手放してしまう。

『天気は良好だそうですので、明日の昼にはここを発ち、明後日の朝に出る船で帰らせていただきます』

帝にとっては仮面と同じくらい忌々しい西の国の娘、スズ。

《仮面》の手がかりとなる娘と唯一会話でき、その娘の身柄を預かっている娘はあろうことか《仮面》の娘も連れていくと言ったのだ。

『しかし、その娘はこの国にとって……』

『それはどうでもいいんです』

悩みつつも帝は頭を抱える他に手がないと知りつつ、昨日のことの続きを思い出していた。

『この国の一大事にどうでもいいとはどういうことだ……！』

『言葉が悪かったですね。では言い直します。』

彼女の身元はすでにあたしの方で確かめてあります。間違いはありません』

娘は悪びれずに言った。そして帝が身元を明らかにしろと言つと。

『言つても無駄でしょう。』

あなたは信じないでしょうし、認めないでしょう。あたしは無駄な言い合いを望んでいません。

これ以上話すことがあるならあたしの家を通してください。』

娘はそれだけ言つて退出していった。

家。娘の『家』のことを帝はよく知らない。わかっていることはその家の娘が国の代表となれるほどの力を持っていること。そして、代々の帝が「手を出すな」と厳しく言っていることである。

よく言えば負けず嫌い。悪く言えば人を見下さないと気がすまない性格の帝はこの言いつけが不思議でならなかった。

なぜ、西の国西国よりも上の立場である自分たちが手を出すなど言わなければならないのか。なぜ、あのような娘一人に自分が押されないといけないのか。

別に東の国が西の国よりも優れているわけではないのだが、帝の感情は不安から不満へ、苛立ちへ、怒りへと変化していった。

何かに八つ当たりしようとして文字通り重たい体を動かそうとした時に部屋の扉が叩かれた。

「帝様。皇太子様がいらしております。何でも話があるとのことでございます」

皇太子、帝の息子である彼が何の用だと思ひながら入室を許可する。入ってきた息子は開口一番に言った。

「あの娘が国に帰ると聞きました」

あの娘とはスズのことであろう。帝が頷くと、息子は続けた。

「私はもう我慢できません。あの娘を正式に私の妻として迎えないのです。」

あの娘ならば家柄も問題ないでしょうし、何より異国の娘を迎え入れるという差別をしないという寛容さも見せつけることができると思うのです」

帝の反論はなかった。

反論の隙が無かったわけではないだろうが、納得はできたのだらう。

「しかし、皇太子よ。その考えはいいとして、だ。ではどうやってこの国に留まらせる？」

どれだけいい考えであっても具体的な方法案がなければ意味がない。だが、皇太子は迷うことなく言った。

父親に、取引を持ちかけたのだ。

「私は何もできませんが、父上があることをやってくだされば、可能です」

帝は信じられないといったように息子の顔を見た。

「あの娘は必ず、今日の出立の前に挨拶に来ます。それは毎年のことですからね。」

そこで父上が一芝居つつのです」

「どのようなものだ？」

「《仮面》と繋がりのある疑いをかけられている娘がいたでしょう？ あの娘を使います。」

私の手の者をその場に一人、置いておきます。そして、父上はど

うとでも言つてその娘にいくらか喋らせればいいのです。

あとは私の手の者が「西の国の言葉ではない」と言い、父上が適当に理由を付けてくださればどうとでもなりましょう」

気に入らない娘に一矢報いることができるその計画を聞き、帝は二つ返事に承諾した。

二人はもう少し綿密な計画を練る。ほとんど息子によって完成していた作戦はこうして完璧なものになった。

だが、二人は知らなかった。これから二人が手を出そうとしている二人の娘がどれだけ力を持っているのかということ。

熱心に会話をする二人の横で一匹の猫が退屈そうにあくびをした。

そして、昏。

スズと梓を乗せた馬車が皇居の前にあった。荷物は一足先に送つてあるため、馬車の中は適度な広さがあった。

「え？ 梓も一緒に、ですか？」

「ああ、そうだ。帝の御命令である」

「この国にいる間はその娘に対する疑いは晴れてはいない。ゆえにあなたから離れないようにするために、連れてこいとのことだ」

「……それなら仕方がないですね。しばらく待つていてください。連れてきます」

内心ではいつまでふざけたことを言っているんだ、あのデブと思いながらもそれを顔に出さず、馬車に戻る。

梓の反応も似たような物だった。スズから自分だけで最後の挨拶に行くつもりだから、馬車で待つているように言われてかなりほつとしていたのをスズはわかっていたため、申し訳ない思いであった。



「ごめんね。本当は断ることもできるんだけど、危害を加えられない限りはなるべく波風たてないようにって言われてるから……」  
「仕方ないですよ。命令なんですから」

二人は二人を待っている門番の所へ早足で向かった。

二人としては皇居この場所からなるべく早く立ち去りたかったのだ。

スズはこれまでの習慣から。梓は帝という人物が苦手だったから。

「さっさと行って帰ろう」

「そうですね。私も早く私が出た世界に帰りたいです」

そして、二人はまだ知らない。

これから向かう最後の挨拶を行う部屋に罫が張られていることに。梓がこの世界に来て十四日目。梓の異世界旅行は終わりへと向かっていった。

## 豚の部屋

飛べない豚はただの豚だそうだ。

「じゃあ、帝はあの豚のなんだろう」

喚いて、考える脳のある豚はどうだろうかと、梓は考える。

場所は豪華な部屋。装飾の無駄すぎる輝きから帝の部屋だとは予想できた。

スズと離されてしまい、彼女が今どこにいるのかわからないのでその事が不安であった。

帝に挨拶に向かった梓たち。今日も変わらず目に痛いこの場所に  
あのとときと変わらず帝は座っていた。

スズと帝がなにやら話しており、やがてスズが礼をした。  
ようやく終わりかと安堵したときに帝がなにかを言った。その顔  
にはなんと形容しがたい笑いが浮かんでいた。

スズは困ったような顔をしてから梓に喋るように言った。  
なんでも梓の話す言葉をもう一度確認したいらしい。

「大丈夫だよ。どうせわかんないんだし適当に喋っておけば」

そうスズが言ったので言いたいことを言わせてもらった。

内容はだいたいがこの場所の装飾の悪趣味さであったり、帝の肥  
りっぷりだった。

《おお、そこまで言えるとはすげえなあ》

(どつせ通じないなら何を言っても問題にならないから、いいやと思つて)

スズを見ると肩が震えている。恐らく笑いでも堪えているのだろう。

これで終わりかと思つたら、帝が横に立っていた人と話し始めた。しばらくして帝が何かを言い始めた。

「その者がしゃべる言葉は西の物ではないな」

今しがた話していた相手は言語に詳しい人物だつたらしい。

しかし、そう言われることくらい予想していたと言わんばかりにスズの態度は変わらない。

スズは顔には何も表さずに淡々と返す。

「向こうでも珍しいタイプの訛りですから、あなたが知らないのも当然かと思えます」

「いや、こやつに聞いたところ西の物ではないと言う。こやつはどちらの国の言語を調べておるものでな、訛りも調べておるのだよ」

帝はニヤリと笑つた。

そしてそのままスズと梓の捕縛を命じた。

帝にとっては意外なことにスズは一切の抵抗をしなかった。梓にも何かを言つて、梓も何もしなかった。拍子抜けすると同時に何か裏があるのだろうかと思うが、ここはスズの故郷から海を挟んで遠くの国である。適当なタイミングでスズだけ開放すれば何の問題もないと思ひ、梓を帝の自室へ。スズは息子の部屋へと連れて行くように命じた。

スズは何も言わなかったが連れて行かれ、この場から出て行くときに帝を見つめてから出て行った。

その目がまるで自身を哀れんでいるように感じた帝は激昂した。

「その不屈き物をけして逃がす出ないぞ!!」

怒りを言葉に。その言葉を聞いた兵士は恐怖のためか、はたまた仕事への熱意かは知らないが威勢よく返事をしてすぐにこの場から出て行った。

スズは大きくため息をついた。まさかこんなことになるとは思っていなかったのだ。

今の帝は、歴代に比べると政治手腕はいいほうであるが、それ以外のほうにはあまり頭が回らないと評価されていたのを聞いたことがある。そのことから考えると自分たちをはめるための作戦を考えたのは帝ではないだろう。

となると誰なのか。帝の側近だったり、もしくはそれ以外の誰かだろうか。

考えても分からない。それに、とスズは足首を見た。はだしにされたそこには頑丈な錘つきの鎖がついていた。逃がさないという意思の現われなのだろう。

「その割にはここに息子の部屋につれてこられたことが……」

適度に整えられた調度品に女物かと疑うような化粧台が置かれたこの部屋は帝の息子のもので、ついこの間も梓をつれてきたところである。

ナルシストで、性格は帝にそっくりで、でも、政治手腕はだめだ

めだろうと評価をされている、帝の息子。

スズは再びため息をついた。今この部屋にはスズ一人。この閉めきられた部屋には人が来る気配はない。息子は息子でやることがあるらしく、スズを迎えた後に部屋から出て行った。その際に「今日の夜は楽しみにしていいね」なんて言われたので今も鳥肌が収まっ  
ていない。

「抵抗は、よくできて三日、かな」

つぶやいた言葉は誰にも届くことはない。

## 二日後、部下の気苦労

それから二日。帝はとても機嫌がよかった、その息子も機嫌がよかった。

宮で働く文官も武官もだれもそんな彼らには何も言わない。もちろん、いさめるべきなのは分かっている。言葉の通じない少女はともかく、西の特使は開放した方がいいのではないのか。きちんと理由をつけて特使には帰ってもらった方が西との衝突がなくていいのではないか。誰もそう思いながら言わなかった。

「あの娘たちがこれからどうなるのか、ご存知ですか？」

「少なくとも特使様のほうは皇太子様の後にされると思うが。そういうつわさは多いだろうが」

「ええ、そうですが。では黒髪の方はどうなっているかご存知ですか？」

「俺はまだ帝の部屋にいと聞いていますが、実際はよく分からん」

廊下を歩くのは朱旺とその部下だ。朱旺は気が立っているのかいつもよりも歩くスピードが速く、部下の方はついていくのもやっとやっとなのである。

気が立っていることを指摘したらそんなことはないと言われ、そのあと、二度とそんなことを言うなと目で威圧されたのでこの部下は黙って朱旺に言われたとおりにして彼についていっている。

この部下は朱旺があの少女たち二人とそれなりに仲が良いような印象を受けている。それはつい先日彼らが楽しそうに話しているのを見ていたからなのだが、そのときの朱旺の雰囲気からもそうなのだろうという推測はできた。

「朱旺様はすごく落ち着いているようですが」

「それがどうした」  
「いえ」

部下は黙った。まちがいに気が立っているというのは先ほどから良く分かつている。こういうときは沈黙が金という。

ここで変なことを口走ってしまうとその苛立ちの矛先が自分に向く。

そうやって、黙って朱旺についていくと、ある場所に着いた。

そこは皇太子の部屋。現在は西の特使が軟禁されているとされている場所で、それを示すかのようにして二人の兵士、朱旺とはまた違う部署の者たちが扉に見張りとして立っていた。

「朱旺様。自分の勘違いではなかったら、ここは……」

「皇太子様の部屋だ」

「何をしにこられたのか、聞いてもよろしいですか？」

「西の特使殿に会いに来た」

え、やめましようよ。あそこにいるの皇太子様の親衛隊ですよ。いくら朱旺様でも通れませんって。むやみに火種作るのやめましよう。ただでさえ親衛隊とうちは仲が悪いんですから。

こいつは腕は確かなのに気が少し弱いな、そう思いながら必死に止めようとする部下の言葉を無視して朱旺は前に進んだ。

「ここは皇太子様の命により皇太子様以外は通すなと言われている。貴殿らはいかなる理由でここへ来た」

「先日、そこにいとされるとされる西の特使殿に頼まれたものを持ってきた。直接渡すようにと言われたので中に入れていただきたい」

朱旺の用件を聞いた二人は困ったように顔を見合わせた。

彼らの主君たる皇太子からは、中から出すな、外から入れるなと

いうもの。しかし、目の前の男は中にいる少女からじきじきに頼まれているという。こういう場合どうすればいいのか。

二人は悩んだ末に男を通すことにした。皇太子は西の特使が不機嫌だった場合、自分たちに八つ当たりというか尋問をする。それは彼らにとって歓迎できないことであるのは言うまでもない。

「なれば、我々がともに中に入ろう。その条件ならば別に会ってもかまわん」  
「感謝する」

朱旺は部下とともに中に入った。部下の方は入れたことに驚いている。

中に入ると、親衛隊の二人はしっかりと唯一の出入り口である扉の前に立った。

朱旺はそんな彼らには目もくれずに目の前に座っている西の特使である少女、スズを見た。

「あれ、朱旺さんじゃないですか」

スズは流暢な東の言葉でそう言った。

「本当はちゃんとした格好で迎えることができればよかったです  
が……」

「いや、それはいい」  
「でもこの二日、お風呂にも入ってないんですよ？ 年頃の娘としてはすごい気になるんですよ？ ところで、朱旺さんがわざわざここに来るようなことって何かありました？」

スズの問いに朱旺はとぼけるな、と言いながら懐から頼まれていたというものを取り出した。



懐に手を伸ばした時に後ろの親衛隊が腰に携えた得物に手を伸ばし、後ろの部下もそれに応じるように体に力を入れたが、出てきたものを見て彼らの緊張は緩んだ。

「頼まれていたものだ」

「……そういえば頼んでいましたね。すっかり忘れていました」

朱旺から渡されたもの。片方の手のひらでちょうど包めるほどのただの緑色の石を丁寧に握り、スズは朱旺に礼を言った。

その後はこの二日間のことを聞かれて朱旺は正直に答えた。できるだけ皇太子の話題は選ばず、帝の周辺、特に梓に関するうわさについて話した。

それに対するスズの反応は予想よりも小さかったが、朱旺は興味があるということにはわかった。責任感の強い娘なのではめられたということには気づいているだろうし、なにより、梓の面倒を最後までみることができなかったのが悔やまれるのだろう。

「もしも頼んだら、次も何か持ってきてくれますか？」

「まあ、可能なら、だが」

「ならそうですね。明日の夕方にでも来てください。そのときに板を持ってきてくれるとうれしいですね」

「板？ それはまたどうして」

「ちよつとした心のよりどころがほしいんですよ。あの皇太子様、ちよつと一緒にいるのがつらいくらい言い寄ってくるので……」

そのこの扉くらいに頑丈で大きいのがいいです。スズはそう言っ自分を感じ込んでいる扉を指した。

朱旺は了解し、親衛隊にその持込がスムーズに行くように、明日の夕方の来訪に関して許可をもらつとそのまま部屋から出ていった。

親衛隊としては皇太子が気に入っている人の機嫌を損ねたくないのと、板くらいはいいだろう、と言う考えのもと許可を出した。

「ああそうだ、お前」

「何でしょう朱旺様」

「明日来る時は、またついてこい」

「はい？」

今日だけでもかなり精神が磨り減ったのに。明日もまた後ろから切られる可能性を考慮して立っていると言っているのか。今日だって武器に手を伸ばされた時かなり怖かったんですよ。

部下が泣きそうになりながら、言いたいことすべてを外に出さずにそれに頷くと朱旺は満足そうに帰っていった。

全員が部屋の外に出て、また一人、部屋に残されたスズは緑色の石を手のひらで転がしながら考える。

しばらくして。

「まあ、この状況で考えても意味はないのかな？ アリスみたいに力づくかな……。あんまり好きじゃないんだけど」

そう言って彼女に与えられたベッドに寝転がった。

とらわれのお姫様には王子様が助けに……

スズが、朱旺から石を受け取る数時間前。その日の昼のことであった。

ここは帝の部屋。梓は一人、痛みを小さくしていた。この二日間、梓は帝から暴力を受けていた。性的なものでないことだけが唯一の救いだった。痛みを感じなくなったかと思えば思い出したかのようにひりひりと痛み出す感覚に、梓は何度目かも分からない涙を流した。

「帰りたいたいよお……」

暴力によってぼろぼろになった服。自分の体を抱きかかえるようにして小さくなって、梓は泣き続けた。

あの、茶髪の、明るく笑って自分の手を引いてくれたスズに、また会いたい。

つい先日までの状況が夢のように思えてくる。

「こっちが夢の方がよかったよお」

涙のしょっぱさと、感じる痛みが夢でないということを示している中、梓はひたすら泣き続ける。この場には梓以外の人間はいない。趣味の悪い豪華な部屋。今もその豪華さを示すかのように梓がいる床にはカーペットが惹かれている。

泣くのに疲れて横になる。やわらかいカーペットはやさしく梓に触れ、それだけで安心してしまふ。枯れたと思った涙が安心のせいかまたこぼれてくる。

「ふええ……」

《いつまで泣いてやがる。このへタレ!!》  
「だってえええ」

ハルが何か言っているが梓には届いていない。むしろ声をかければかけるほど泣いてしまうのだ。

《ちっ。とりあえず黙れ!!》

「うえええええん!!」

わがままを言う子供のようにうつぶせになって泣き続ける梓。ハルの方はもしも体があれば一発、梓を殴りたい気持ちになってくる。女だからと言っても今の梓はそれだけ見るに耐えなかった。

《いい加減に、しろおおおおお!!》

今までのように内から響くような声ではなく、外から耳に聞こえてきたような怒声に梓はびくりと体を震わせて泣きやんだ。

「ハル？」

思わず、見たこともないハルの姿を探したが見当たらず、見えな  
い不安からさらに泣きそうになったところに再びハルの怒声が響い  
た。

《いい加減にしろよ!! 今日朝からずっとその状態じゃねえか  
!! 昨日はまだ耐えてたつてのに今日のこの様は何だよ!!》

「だって、だって。痛いし。スズさんもないし。あの人は怖いし  
……」

《それは否定しねえけどな。今は痛覚がねえから分からないが、確  
かにあいつは怖かったな》

「なら、分かるでしょ!!」

ヒステリックな叫びに対して、外から誰かがやってくることはない。この部屋には今、誰も近づかないようにとの命令が下っているからだ。ただし、梓が死ぬと困るので食事だけはちゃんと用意される。つい先ほども、何とかして口に物を入れて胃の中に入れたのだった。

たった二日ですっかり憔悴してしまい、今の梓からは二日前の明るさがまったく感じられない。どれだけ帝の暴力がひどかったのかをその様子が物語っているようであった。

しかし、そんな梓の悲痛な叫びに対してハルは無情にも突き放した。

《だからつめてめそめそ泣いてて解決すんのかよ!!》

《その通りですわ》

第三者の声に、梓はうつぶせの状態から一気に上半身を持ち上げた。きよろきよろと顔を動かし、先ほどはハルを見つけれなかったこの部屋の扉の前の空間には十歳ほどの幼女が宙に浮いていた。

幼女は彼女の身長より長いこげ茶の髪に、まるで森を思わせるような深い緑の瞳。服装は白いワンピース。スカートは何枚ものレースを重ねてあるようでふんわりとした印象があった。

《確かに、そちらの方がおっしゃるとおりですわ。梓様、でよろしかったですでしょうか?》

幼女はすべるように梓に近づき、優しく微笑んで戸惑う梓の前に立ち、礼をした。

その礼もきちんとしてつけられた、梓にとっては映画の中で見ただけがなかった中世の貴族のようなもので、スカートを持ち上げ

て深々と頭を下げられた。

《主様あまのさまより命じられて参りました。風姫かぜひとお呼びくださいませ》  
「え、えっとはじめまして。吉住梓です。ここへは何をしにこられたんでしょうか」

ついついつられて敬語になってしまい、緊張のためか硬くなっている梓に苦笑し、風姫は目的を告げずに、さらに一步近づき梓を抱きしめた。

抱きしめられる瞬間、帝からされていた暴力を思い出し身を硬くしたが暴力を振るわれることはなかった。むしろ落ち着いたくらいだった。

《私わたしの力ではそこまで強力な治癒はできませんが、梓様を落ち着かせるくらいなら余裕ですわ。大分、落ち着かれたかと思いますが、いかがでしょう》

「ありがとうございます」

《で、お前は何をしにきたんだ？》

風姫と梓。二人の間にほんわかとした空気が漂ってきたところにハルが割り込んでくる。

風姫はそれまでのやさしそうな笑顔をきゅっと引き締め、用件を告げようとした。

《ええ、そうですね。主様からは梓様の護衛と、こちら》

出されたのは小さな緑の石がついたネックレスである。よくよく見れば石は風姫の瞳の色と同じ色である。

しげしげと受け取って眺める梓に風姫が説明をする。

《スズ様にも同じようなものが渡されますわ。 そうなればそれを介して会話ができるようになるのです》

「へえ……」

絶望の中、ようやくと見つけた、与えられた希望に梓の表情は目に見えて明るくなった。

うれしそうにそのネックレスを握り締める。握り締めた後、風姫にそれをつけてもらい、再び強く握り締めた。

《あともう一つ。護衛の話なのですが、それはもう一人の方に頼まれた方が良くと思います》

もう一人に心当たりがない梓は風姫にそれを尋ねると、風姫はどうして気づいていないのだろうという表情をして梓を指差した。

自分のことかと驚き、確認する梓に風姫は首を振った。違います、そう言ってさらに言葉を続けた。

《梓様の中にいらっしゃるお方ですわ。私よりもよほど守りに長けた力をお持ちのように伺えますが……》

「ハルのこと……？ そんなことが分かるんですか？」

《ええ。私は力があるといいかもしれませんが、所詮は精霊でございますが、そちらの方は神なのでしょう？》

所詮、精霊という基準が良く分からないが、風姫には梓にくっついていてハルが神だと分かるらしい。

一方のハルの方は照れたように、恥ずかしながらと言っている。都合のいいやつ、とは思ったがハルの力はたしか使えないはずである。そのことをハルに確認しつつ風姫に伝えるとハルがそれを否定した。

《や、大丈夫だ。なじんだって表現がしっくりくるんだが、今なら力は使える。ちょっとお前の協力があるが、いいか？》

「大丈夫。何をやればいいの？」

二人の会話を聞いて風姫が梓から少し離れた。

そういえば彼女はなぜかハルの声が聞こえている。そのことを不思議に思ったもののたずねずに、ハルの言うことに意識を傾けた。

そして、梓はハルに言われたとおりに行動する。簡単な言葉を言うだけだったのであつという間だった。



お約束というものをこの身で体験する日が来るとは……

「えっと、『山となりわが身外から守れ』？」

そう言ったものの周囲にこれといった反応はなく、言った梓が恥ずかしくなって顔を赤くする。ハルがおかしいなあと言っているのを聞いて、あんたが言ったとおりやってんのにと思った。

首を傾げるくらいならはじめてからそんなことを言うなど、ハルにそういえばハルはできるはずだと返した。

二人が言い合つのを黙ってみていた風姫があきれたように息を吐いて言い争いをさえぎった。

《おそらく理解できないのではないのでしょうか》

「理解できない？」

《はい。梓様は、こちらの世界の言葉が話せないのですでしたね？ ならば、こちらの世界の何に話しかけたのか分かりませんが、通じていないのでは？》

《む……。それは考えてなかった》

同意したハルは梓に先ほどとは違った指示を出した。床の絨毯に触れて、自分を守るような形を想像しろとのこと。さらにそのときには具体的にどういう機能をつけたいのかも考えながら、との指示もされた。

《耐火性とかもつけられるはずだから、多少無理なことでも想像してみるといいぞ》

「分かったわよ……」

ぶつぶつと文句を言いながら絨毯に触れる。集中するために目を

閉じて、想像するのはテントのような形。空気穴と外が見えるような穴がついていて、耐火性、耐水性に優れ、硬く衝撃によって壊れないもの。魔法すらはじくもの。

むむむとうなりながら念を送るようにして想像した。ハルの言葉に目を開けてみれば真つ暗であった。

「なにこれ」

《外に出てみれば分かるぞ》

外に出てみようと思っただけで出れそうな場所を探すが、ない。

《出口作るの忘れただろ》

「……」

《あーもう。一度設定したやつは設定を付け加えたりできないんだぞ？》

やってしまった。出れなくなったと頭を抱える梓。ハルいわく、想像した機能がすべてについている代物らしい。ために壁をたたいてみると硬い。手触りは絨毯のものなのである。

何が起こったのか、とハルに問えば自慢げに答えが返ってきた。

《俺つてもともと、布を自由に扱えるんだ。布専門の神だな。だから布なら思ったとおりに行ける。服とか着てたらその服ごと性質を変えることが出来る。でも服に変に機能をつけちゃうと後々不便な時があるからそれは最終手段だな》

そうか、布の神様だったのか。今までは状況というか世界になじめていなかったから使えなかったとのこと。ここで使えるようになるとはかの有名なお約束なのか。

まるでマンガの世界だなと思いつつ外を見ることが出来る穴か

ら外を見る。扉が真正面になっていた。風姫も見える。  
風姫はにこりと笑うと近寄ってきた。

《すごいものを作られましたね》

「出れないんですけどね……」

梓の苦笑にあわせて風姫も一緒に笑った。風姫はそのままするりと中に入ってくる。元は床一面に広がっていた絨毯で、この部屋はかなり広い。風姫が入ってスペースがぎりぎりになるくらいだった。部屋の絨毯の上に乗っていたものはどうなったのかと風姫に聞けば倒れたりはしていないとのこと。まったくもって神様パワーと言えばいいのか、摩訶不思議である。

《出れないのでしたら、スズ様に頼めばよろしいかと思えますわ》

「スズさんに？」

《ええ、スズ様の力でしたら可能でしょう》

仮にも神の力でつくった物を壊せるスズの力と聞いて少しスズのことが怖いと感じた梓。それに気づいたのか風姫はフオーする。そんな力をむやみに使う人ではないと言われれば、確かにそうだろうと思える。

それに心に余裕が出てきたおかげで、スズのことにも気にかけることができるようになった。そこで、渡されたネツクレスを思い出してスズと話をしてみようとしてみたが、やり方がわからなかった。使い方を聞くと風姫はまだ使えないと言ってくれた。

《石はまだスズ様に渡っていないようなので繋がりません》

「そうなんですか。スズさんは元気ですか？」

《こちらに来る前に少し見てまいりましたが大丈夫そうでしたよ》

ほっとする。ここにいる間はいつも一緒にいたのに別々にされてしまったので不安だったのだ。この風姫と出会ってからほんの少しの間だけでずいぶんと気が楽になっている。

風姫が何かしてくれたいと言っよりかは、自分の身を守る環境を手に入れることができたことが大きい。梓はしばらく暴力に合わないと思えると眠くなってきたのを感じて、そのまま眠ってしまった。

今夜も《仮面》の一員であろう娘をいたぶれると帝は機嫌よく部屋に入ってきた。あの泣き叫ぶ顔を見ると今まで《仮面》どもにやられたことを考えると昨日までの暴力はまだ足りなくらいである。

今日は何をしようかと考えていたあまり、娘をいたぶろうと部屋を見回すまで気づかなかった。部屋にできた異物に。

ために軽くたたいてみると硬い。よくよく見ればそれは帝の部屋にあった絨毯と同じものである。さらによくよく見てみると娘の姿が見当たらない。外に出たはずはないのでつまり、この中にいるということになる。

「んっ……」

怒鳴り声が聞こえてきて、梓の寝顔が安らかなものからつらそうなものに変わった。

《大丈夫でしょうか……？》

《こいつ、防音の機能を付け忘れたな》

《ハル様、でしたか？ 確か梓様とリンクなさっているので寝ている間はハル様も眠っていると聞いていますが》

どうやら、今の怒鳴り声で意識が半分覚醒したらしい。普通の人

ならなら寝ぼけた状態になるのだろうけども、ハルと梓の二つの人格があるせいでハルだけが目覚めたらしい。

その説明をハルから受けた風姫は、梓の眠りがこの怒鳴り声に邪魔されることを懸念した。せつかく気持ちよさそうに眠れているのだから邪魔するのは良くないだろう。

しかも、眠りを妨げているのは連日梓に暴力を振るっていた帝である。風姫が力を使って帝をどうにかしてもいいが、そうすると梓に更なる負担をかけてしまう恐れがあった。ハルも今は梓を介してでないと力を使えないらしい。

三秒ほど考えてから風姫は梓の閉じこもっているテントの周りに防音の境界を張った。音が遮断されて梓の寝顔は再び安らかなものになった。

《おおー助かった》

ハルの感謝に風姫は目礼で返した。

《梓様がここに閉じこもったまま何日も過ぎるとは到底思えませんが、早ければ明日にでも何か行動を起こすでしょう。スズ様もおそらく明日、動かれると思いますからそれまでゆっくりしてくださいませ》

この言葉に対する返事はなかった。おそらく梓の眠りにあわせてハルも眠ったのだろうと考えた。ここは大丈夫だろうと思った風姫は帝の部屋から出て行った。

## 思い立ったが吉日、思い立たれたが凶日の始まり

そして、朱旺がスズに石を渡した次の日。梓がゆっくりと眠って目覚めたその日。

帝はすぐさま行動した。引きこもった梓を外に出すのたためである。

自分の部屋で火などを使うわけには行かなかったので、剣などを使って斬ってやろうと思ったのだが、硬くて刃が通らない。重さを利用した斧を兵士に振り下ろさせても壊れない。最終手段として火を持ってこさせたが、調度品が燃えそうになっただけで梓の入っている布の塊はまったく燃えていなかった。

面白くない。そう思った帝はさらに兵士を呼んで布の塊を外へ運ばせた。どれだけ燃えなくても周囲を火で囲めば暑くなって出てくるだろうと考えたのだった。

日が傾き、空が赤くなってきたころのことだった。

帝の息子は上機嫌であった。日がそろそろ傾くといったころ。親衛隊の一人に呼ばれて自室に戻ってみれば今、最も愛している娘が頬を赤らめて、ようやくあなたの魅力に気づきましたと言ってきたのだ。

せっかくですから外でお茶でもしませんかと言われて断る理由もなく、すぐさま準備をさせた。ここは見晴らしがいいとされる場所で、目の前には大きな桜の木があり、よく帝は家族を集めてここで花見などを行っていた。

そんなお茶会が始まってからどれだけの時が過ぎただろうか。そろそろ空が赤くなってくる。

「さて、そろそろ日も暮れて寒くなる。部屋に戻ろうではないか」  
「ええ、そうですね」

差し出した手を娘がとった。そして立ち上がる。息子は、今夜は部屋で愛を語り明かそうと考えていた。

だが、娘。スズの方にはそんなことを考えているということはまったくなかった。ただでさえ、このナルシストな息子に付き合っているだけで鳥肌ものだというのにこれ以上お世辞やら作り笑いだなんてやってられない。一刻も早く梓と一緒にここから出て行きたい。スズの作り笑いの裏にそんな感情が潜んでいるとも気づかない息子はスズをやさしく抱きしめた。そしてそれがスズの我慢の限界となった。

「『答える。梓はどこにいる？』」

その言葉に、息子はいつものような余計な行動を入れることなく淡々と帝の部屋にいるはずだと答えた。

息子の様子の変化は周りには気づかれていない。息子自身は今何を言ったのかと首をかしげていた。

「ありがとうございます」

息子はその礼を抱きしめてあげたことに対するものだと思った。気にしなくていい、自分はそなたを愛していると言えばスズは照れくさそうに笑った。

やはり、この娘は愛らしい。息子は改めてそう思い、部屋へと戻ろうとした。

なのでこの発言が後ろにいるスズのものだと最後まで信じられなかった。

「あたしはあなたのことが大嫌いです。『眠れ』」

そして、息子そのまま意識を失った。周りにいた侍女や親衛隊の面々も同様である。

意識を失い、床に転がった面々を見てスズは笑顔だった。息子に向けていたようなものとは違う、晴れやかですつきりとしたものだった。

そして、その後帝の部屋がどこ分からず、息子を起こしてからそれを聞き出してからまた眠らせてスズは移動を始めた。しばらくして、侍女たちがなにやら話しているのが聞こえる。その中に梓のことを示すような単語があることに気づいたスズはその侍女たちに話を聞き、彼女たちも眠らせた。

「もっと早く連絡を取るべきでしたね……」

梓がなにやら変なものに閉じこもっていて、出すことがまだるっこしくなった帝が変なものごと燃やそうとしている。そんな話を聞いてスズはあわてて梓に連絡を取った。

梓はすでに泣きそうになっていた。風姫がまだいたことには驚いたが、そこは今はどうでもいいと思い、梓に今の状況を聞いた。

「なんか運ばれてるんですけど、どうすればいいんですかー？」

「どこに向かっているのか分かる？」

「そんなの分かるわけないじゃないですか……」

確かに。梓には分かるわけがない。どうすればいいだろうか。

悔しくて、どこに向かえばいいのかわからないのに早足になり駆け足になった。

火が使えるような広い場所。他に燃え広がる場所がないだろう所。ここは広い皇居である。そんな場所は両手で数えられるほどしかない



いが離れすぎている。とりあえず、一番近いところに行こうと思っ  
て方向を変えたところに風姫がいた。

「風姫？」

『案内しますわ、スズ様。ついてきてくださいませ』

風姫が動く。スズは黙って頷いて走り出した。

どうやらスズがいたところから一番遠いところのようだった。ス  
ズが動くことを分かっていたわけではないだろうが、それを考えて  
いるかのような感じだった。

間に合え。梓を助けて、元の世界に帰してあげないといけないの  
だ。帰ることを拒否した自分と違って、梓には待ってる人も帰りた  
い理由もあるだろうから。

足にさらに力を込めた。そろそろ体力の限界であるがそれに構っ  
てはいられなかった。

そして、梓がいるであろう場所に着いた時、ここでは火がすごい  
勢いで燃え上がっていた。中央に梓がいるらしい変なものというの  
があるのは分かったが、あまりの熱で近づけない。

しかし、これしきのこと諦めるわけにはいかないし、諦める理  
由にもならない。

「『火を消せ』!!」

スズのその言葉のあと、一拍おいてどこからともなく現れた水が  
燃え盛っている火を一瞬にして消した。突然聞こえた声の発所を発  
見し、その直後に火が消えてあせる兵士や、驚く帝をまったく気に  
せずにスズはただ梓が中にいるであろうものに向かって言う。

風姫からここに到着するまでの間に話は聞いていた。自分の力な  
ら大丈夫だということは風姫にも言われたが、スズにもその確信が  
あった。

「『戻れ』」

その言葉に合わせて、布がそれまでの硬さが嘘であったかのようにやわらかくなり、形を崩した。中にいる人間がそれにあわてたように動いているのが、布越しのシルエットで理解できた。

そして、その布の中から出てきたのは梓。

捉えられてから二日。梓とスズは無事に再会することができた。

手加減はしてくれそうです

二日ぶりに会えた二人はうれしそうに抱き合った。

それを許せない帝はスズに怒鳴りつける。息子はどうしたのかと。貴様もいくら西の特使といえど罪人として裁かねばならないと、そう言っただけで周りの兵士に捕らえるように命じる。

「無駄ですよ。『あたしたちに攻撃するな』」

スズがそう言っただけでスズたちに飛び掛ろうとした兵士たちがそこから動けなくなった。後退はできるが前進はできない。否、一定の距離からは近づけない。更には魔法もかき消されてしまう。

帝は驚いたもののすぐさま思考を切り替える。

なぜなら、スズは今魔法を消して見せた。消す。その行為はまさに《仮面》と同じ。

西の特使も《仮面》の一員だと宣言し、捕まえるように再び兵士に命令した。

帝の宣言と命令をスズはあきれた顔をして聞いていた。どうやら《仮面》と勘違いされたらしい。スズの力はそれとは全く違う。スズの力は魔法ではないし、魔法に作用するものでもない。

「馬鹿らしいですね。『帝以外は全員寝てしまえ』」

その一言でこの周辺にいた兵士、女中がばたばたと眠ってしまう。慌てたのは帝であった。《仮面》の仲間であろうスズたちが目の前にいて、自身を守る兵士はみな役立たずの状態になっている。

スズに《仮面》なのかと問えば否定を返された。そんなこと分らないのか、という目で見られている気がした。馬鹿にされているような気分だった。

「ならば、貴様は何者だ!!」

「はじめに、初めて会ったときから名乗っていると思いますよ。あたしはスズ・レイゾイル。西の大企業レイゾイルに厄介になっている者ですよ」

スズはすました顔でそう言った。

「《仮面》なんかと一緒にしないでください。あたしは梓と一緒に帰ります。邪魔はしないでください」

しないでください、とは言っているが帝一人ではたいしたことはできない。スズの行く手をさえぎるものはない。

梓はスズたちが何を言っているのか分からなかったが手を引つ張られたのでスズについていこうとする。周りにいる屈強な兵士たちを触れることなく倒したスズが怖くないわけではなかったが、なんとなく、スズは自分にはそんなことをしないと考えたから、スズについていく。

そう思った矢先、スズたちの移動を妨げるようにして、スズたちを囲むようにして十ほどの人影が現れた。全員が黒い服で身を包み、仮面をつけている。無言で威嚇する彼らに、スズは足を止めた。

「《仮面》の方々がいいですか？ 最近、噂になってる」

スズの問いに無言で武器を構える相手。

スズの力を魔法だと思い、対策できていると思ったから現れたのだろうか。だとしたら全くの見当違いである。

おろおろする梓に大丈夫と言ってスズは相手に向き直った。

面倒そうな感じがにじみ出ている雰囲気、仮面の一人が襲い掛かった。

「『砕ける』」

何を、とは言わなかったが嫌な音がして襲い掛かってきたやつが倒れた。足がありえない方向に曲がっていることから足の骨が折れたのだと推測できる。

仲間はそれにひるんだ。

「あんまり人に使うのは好きではありませんから、自発的に答えてくれるとうれしいんですがね。あなたたちは《仮面》の方々ですか？　そしてその目的は？」

スズの言葉に相手は互いに互いを伺い、そしてスズの正面にいた一人がそれに答えた。

自分たちは《仮面》であると。

「目的はそこの娘だ」

「梓？」

梓は自分を指差され驚いた。雰囲気からして自分に用があるのだろう。しかし彼らに狙われる理由が分からない。

それに何を言ってるのかも分からない。

「言葉、分かるようにならないかなあ……」

《可能ですわ。その石にそのような機能をつけて差し上げましょう》

風姫によると、梓が聞き取れる範囲ではすべて梓の知っている言語になるらしい。さらには梓の聞き取れる範囲では梓の発した声が相手にあわせた言語になって相手に届くとのこと。仕組みがよく分からない。

なんにせよこれで話が分かる、と思って相手の言うことに耳を傾けてみれば変な単語が聞こえた。

「今、巫女様とかつて、言った？」

《俺にもそう聞こえた》

「誰が？」

「梓のことだよ」

スズによる説明。

神に愛された人物という意味がこもっているらしい。

魔法が効かない人物のこと。

この国が腐敗してきたときに現れる救世主。

「いやいや、それはないでしょう。確かに魔法は効きませんが、その話とはまた違うと思います」

「だよー。あたしもそう思う。とりあえず違うってことを伝えれば？ 風姫のおかげで言葉、通じるようになったんだよね」

「はあ……」

スズはため息をついた。梓はスズの前に出て違うということ伝えてる。

自分はこの世界の人間じゃないからとか、国を救うと言ってもやり方がわからないとか、そもそもこの国に長居する気がないとかを必死に伝えた。

すべて間違っただけだった。

この世界の人間ではないというのは神の世界に住んでいる人間ということに。国を救うやり方がわからないというのは神から指示を受けていないだけ。国に長居する気がないというのは早く次のところに行かないといけないからという風だ。

なんとというポジティブシンキング。

話がかみ合っているようでかみ合っていない。

「だから私はこの国に長居する気がなくてですね」

「大丈夫です。あなた様がいればこの国の再建などあつという間です。すぐに次のところへ救済に迎えます！」

「スズさん。きりがないですよ」

スズはやれやれといった風に前髪をかきあげた。

顔にはわかりやすくあいつら邪魔と書かれていた。なので梓は黙ってスズの後ろに回った。

「梓の言うことちゃんと聞いてます？」

「なんだい、君は」

「まあ、いいです。単刀直入に聞きます。あたしが梓をつれて海を渡ることには反対ですか？」

当たり前だと言わんばかりに全員が再び武器を構えた。

「巫女様を連れて行くのは許さん」

「だったらどうします？」

「魔法使いには絶対に負けん！！」

それはこれまでの話から知っている。魔法は効かないのだ。

だが、彼らは勘違いしている。

スズの力が魔法ならば先ほど攻撃してきた人は足の骨が折れるわけがない。信じられなかったのか、信じたくないのか。どちらかは知らないが彼らはいっせいにスズに襲い掛かった。

「『動くな』」

跳んで襲い掛かろうとしたものは空中で停止させられた。  
地上を走っていたものはその姿勢のまま固定された。

「残念でしたね。勘違いをしていたみたいだから言っておきます。  
あたしの力は魔法じゃありませんよ」

そのまま梓を連れて動き出すスズ。この一連の出来事に帝は何も  
できずにいた。

それが悔しかったが、スズの一言でその悔しさをぶつける相手が  
決定する。

「そうそう、ここにいる連中はあなたが憎いと思っていた《仮面》  
の方だそうです。今の会話から梓が無実だと分かりましたよね？  
あとはあなたが彼らを好きにしてください。兵士たちはそろそろ目  
覚めますよ」



## ちよつとだけ種明かし

鬱憤を晴らす相手が決定したといっても、帝はスズに対してぶつきたい物だつてある。

異変に気づいてやってきた兵士たちにスズへの攻撃を命じた。捕獲優先で確実に捕らえろとのことであった。相手はまだ成人もしていない娘二人であるが手加減はするな、といわれれば取り合えず本気で攻撃をすることにする。

まずは魔法で牽制。土を高密度で圧縮したものを高速で打ち込みつつ目くらましの霧を広げながら近づいていこうとする。

連携をとりつつ、スズたちの正面をキープするのと周囲を囲む組に分かれて行動する。

魔法はときどき土だけでなく、炎や水の玉を織り交ぜる。一般の魔法使いの張る結界は二つの属性に対してのみ有効であることが多いため、三以上の属性の魔法を放てば相手のミスを誘えるからだ。

そして、それは確かに効果を示していた。

霧を広げた魔法使いが霧を介してスズたちの状況を見る限り、二人はただひたすら避けるのに必死らしい。そして、二人のうち一人が体勢を崩したのか地面に転がったと聞いたところで一気に畳み掛けるように指示し、その指示にあわせて三人がいつせいに霧の中へと突っ込んでいった。

「やばい」

そう言いきつたのはスズだった。この状態はよくない。と言って飛んできた石のようなものをぎりぎりのところでかわす。梓もいっばいっばいであるが狙いどころが致命傷になるようなところで

はなく足元を狙っているため死ぬようなことはないということからか、少しだけ余裕がある。

ドッジボールの理論で行けばこれ以上ない嫌がらせでもあるが、二人は幸いと避け続けようとする。

「何がやばいんですか？」

「あたしの能力って、つとと。相手のことを認識しないとだめなんだよ。魔法消すこともできるけど、それは術者を認識してないとまず無理だし、つと」

《うあ、使えねー》

「もともと使えないお前が言うたっての」

見えないと無理、らしい。他にも条件はあるらしいが、とりあえず霧が邪魔とのこと。残念なことに梓にも霧を晴らす方法はない。

風姫は先ほどから見当たらないので彼女に頼むこともできない。

「さっき、帝は生け捕りって言うてましたけど」

「てことはこの後、突っ込んでくるかも。あたし肉弾戦の方は才能ないって太鼓判押されてるんだよ？ 五年ほどかけてようやく護身術としてぎりぎり使えるレベルってとこまできたくらいだよ？」

「あたしは護身術の護の字すらマスターできてませ……」

そこまで言うて梓はあることをひらめいた。向こうから突っ込んでくるのなら好都合である。

今の自分にならおそらく可能なこの方法をスズに伝えると心配そうな顔をしながら大丈夫かと問われたが、そこはスズのフォローを期待すると言ったら笑われた。変なことを言っただつもりはなかったので首をかしげた。

「どのくらい時間を稼ぐ？」

「三十秒もいりません。その間上手く集中できれば……」

《終わったら俺が合図してやるよ。自分だけじゃいつ終わったのかもわかんねーだろ?》

「ありがとう」

そう言っつて梓は目を閉じた。ハルの完了の合図をスズに伝えて、スズが地面に転がるまで十秒ほど。そしてそこに兵士たちが突っ込んできた。

腕の骨や肋骨を折るつもりでの攻撃だったのだろう。鞘から抜かれていない剣が梓のわき腹に強烈な衝撃を与えた。

しかし、梓は倒れない。逆にその鞘をつかみ、スズに合図をした。

「『動くな』」

スズを確保しようとしていた二人、梓に襲い掛かった一人がそれによって動きを封じられる。

三人ははつきり言っつて何をされたか分からないだろう。確実に動けなくするために、動けなくなった相手に、ただ立っつていただけの相手に攻撃しようとしただけなのに、だ。そんな三人を無視してスズと梓は霧の中で会話をする。

仲間を気遣っつてなのか魔法による攻撃はやんでいて霧だけが広がっつている。とりあえず霧を出ようということと歩く。

「それすごいねー。どうやってるの?」

「ハルの力です。布に限りますけど、衣服にも使えるんで」

《単純に防御力を強化しただけだけだな。おまえ衝撃軽減入れ忘れてさつきすごい痛かっただろうが》

「ただ、一度やってしまっつとその布には二度とできないそうですよ。ハルがそう言っつてました」

《無視か》

「便利だけど不便だね。それはあたしも一緒かな……」

さっきのことを思い出してか、スズがそう言ったが梓は全くそうは思わない。どう考えてもスズの力は便利である。

そう言っていると言霧から出ることができた。霧が広範囲だったと言うよりは遠い方の端に出してしまったようである。そして、目指していた出口からも離れてしまったようだ。外にいた兵士は仲間が出てこなかったことに驚いたもののすぐさま魔法で牽制をする。

だがそれはスズにとっては全く意味を成さない。

「『主の下へ帰れ』」

魔法が消滅ではなく反射し、魔法を放った本人に帰る。

それでもひるまず、魔法が放たれるが同じように反射させられる。打撃系は梓の体を張った防御で防がれてしまう。しかし、兵士は帝の命令である以上逆らうことができない。

いつの間にか霧が消えていたので梓とスズは逃げるようにして移動を始めた。

しかし、その前になお立ちはだかる人。帝の息子が現れた。

その顔は怒りに醜くゆがんでおり、後ろにはスズが眠らせてきたはずの親衛隊までいる。どうやら効果が切れたらしい。後ろに帝の前にその息子。完全にはさまれてしまった。

逃げ出せませす、むしろ逃げます

絶体絶命の状態で膠着してしまつた状況を破つたのは朱旺だつた。朱旺はスズに頼まれたでかい板を持つてスズを探していたのだ。

息子の部屋へ行つてみれば見張りの親衛隊はいなくて、中にも人はいない。その辺にいた人に聞いてみれば二人でお茶をしに行つたとか。しかし、そこに行つてみても人はやはりいなくて、どうしようかと歩いていたら時にこの騒ぎを聞いたのだつた。

そして来てみれば、そこでは互いににらみ合い、けん制しあう状態となつていたのである。

「む、朱旺。貴様何をしにきた」

朱旺にいち早く気付いたのは親衛隊から朱旺のことを聞いた息子であつた。

口調からはさつさとどこかへ行け、といったものが感じられる。または、自分の味方をしろ、だろうか。それをあえて無視して朱旺はスズへと近寄つていく。

「特使殿。昨日頼まれたもの、確かにお持ちしました」

それは少し古ぼけてはいるが丈夫そうな板だつた。大の男が二人乗つても問題ないと感じさせられる大きさと厚さをしていた。スズはそれを地面に置くようにと指示した。

「ありがとうございます。朱旺さん。ところで、風の魔法は使えますか？」

スズはちらりと前後を確認しながら朱旺にそうたずねた。聞かれ

た朱旺はなぜそんなことを聞くのかと思った。スズは魔法が使えるものだと思っていたからだ。

じりじりと息子と親衛隊がスズに、後ろからは帝とまだ無事な兵士が梓を狙って近寄ってきている。

「ちょっと使ってくれませんか？　そよ風程度で十分ですから」

「まあ、いいですけども」

そよ風程度の風を言われたとおりに魔法を使って起こした。心地いい風が吹く。

「『わが声に従い、浮かせる』」

風を確認したスズがそう言うときそよ風がやみ、地面に置いた板が段差一つ分ほどだけ浮かび上がった。突然浮かび上がった板に驚いて動きを止めた周囲を気にせずスズは板に乗り、梓にも乗るように言う。男二人が乗っても大丈夫そうな板である。少女二人が乗ったところで壊れるようなことはなかった。

一番驚いていたのは朱旺である。梓に魔法を消されたときも驚いたが、今はまるで自分が発動した魔法を奪う、乗っ取られるような強引な感じを受けた。

こんなことが可能なのか。いや、可能なだろう。スズはそんな朱旺の胸中など気にせず板の向きを変えている。

「朱旺さん。ありがとうございます」

スズは丁寧に頭を下げ、黙礼をする。梓は声を出して礼をする。

「朱旺さんのおかげで、私は帰ることができそうです。朱旺さんにかばってもらっていなかったらと思うと……。本当にありがとうございます」

ございました」

「だそうですよ。梓、落ちないように気をつけてね。『荒れる』」

先ほどのそよ風とは違って変わって立っているのがやっとなほどの突風が発生する。

その突風の中、スズが何かを言った気がしたが、朱旺からは口が動いたことしかわからなかった。しかし、その内容を板が理解したかのように板は滑らかに動き出す。強風の影響を感じさせない滑らかさと勢いで板は動いていく。馬車もびっくりな速度が出ていただろう。

それを見て、大声を張り上げた帝や息子はすぐさまあの二人を追うようにと命じる。その一方で帝はいまだに動けずにいる《仮面》のメンバーの捕縛も命じた。

正直追いつくことはできないだろうと朱旺は思った。あれを追える馬なんていないし、この国には馬よりも速い移動手段はない。この国から出るのならば西への船が唯一出ている港町、西橋（さいはし）へ行くのは間違いないだろうが、そこまでスズたちが先ほどの速さを維持できるのであれば絶対に追いつけないだろう。

見苦しくもあがき続ける国のトップを見ながら朱旺は思った。このままでは駄目になるだろうと。あの《仮面》の連中は表立ってきた冰山の一角に過ぎない。はるか昔、今となっては数える事すら億劫になるほど昔の民族同士の激しい争いを制し、煌家（こうけ）が帝としてこの国の基礎を作り上げた。それから何度もの反乱をすべて鎮圧してきたその末裔が今の帝とその息子。

多少の歴史による誇張があったとしても彼らからは歴史上の偉人達から感じるような魅力はない。朱旺は転職を本気で考えることにしようと決めた。

まあ、今回の件の伝手で、スズの家でもあるレイゾールにでも就職できたらいいなと計画を立てながら朱旺はその場を後にした。

## 丁寧に種明かし

途中立ち寄って、スズが食べ物や水を買った店ではその前の道を歩く人や店の人が板が浮いてすごい速さで動くと言目を集めた。

一晩たち、スズの持っていた財布のお金も底を突いたので野宿した二人はよく晴れた空の下、板に乗って移動を続けていた。

首都からはかなり離れたはずである。スズはこのままのスピードで行けば今日の昼には船の出る港にたどり着けるだろうと言った。

まるで車に乗っているような勢いで進んでいく、そんな板の上で梓はスズの力の説明を受けていた。

説明を受けるようになったきっかけはスズが板の移動は自動操縦だと言ったことからだった。

「えーっと。説明って結構つらいんだけど、さ。あたしの能力は強制命令って言うんだって。あたし自身は命令するのは嫌だから、げん言を送る」って言うてるんだけど」

「言？」

「言霊とも違うから。言霊はそこに魂っていうか霊力っていうかなんにせよ力をこめているんだけど、あたしの場合は『命令形にする』だけで発動しちゃうの」

だからスズには魔力というものを持っていないとのこと。ハルによれば、神が力を使うときには文字通り神としての力を使っており、その精度は精神状態と神としての器、つまり健康状態に影響されるらしい。そちらの方がよっぽど魔法らしいと思ってしまった梓だった。

スズという言の力にも制限があるらしい。まず基本的に言葉の通じないものは無理だそうだ。



「でも、物には命令できるんですよ？」

「形あるものには魂が宿る。付喪神みたいな感じって言えば分かる？」

逆に形のないものには言葉が通じてても命令はできないらしい。スズが認識できていることという条件もあるらしい。

魔法は、術者を認識しているから反射したり、消したりできるのだとスズは言った。

これが動いているのも朱旺の魔力を使って魔法を発動した精霊を言で使役しているとのことらしい。

「へん？ 魔法ってのはそいつの魔力だけで発動してるんじゃないのか？ 神界じゃあそういう風に習ったんだけどな。ちょっと聞いてくれないか？」

「スズさん。魔法ってどういう仕組みで発動してるんです？」

珍しいというか初めてのハルからの頼みごとを素直に聞いた梓。

スズはまるで教科書の内容でも思い出すかのようにして空を見上げながら説明を始めた。

「えっと、この世界では主に魔法は三種類に分類されて……。まず、精霊術魔法。これは自分の魔力を少量、大気中に存在する精霊に分け与えて精霊が魔力を増幅して術者の望んだ魔法を発動させるってやつで……」

あとの二つは符術魔法と、魔術魔法に分類されるらしい。こちらの二つは精霊を介さず魔法式、またの名を術式という物を構築して発動させるとのこと。

符術の方はあらかじめ式を符に書き込み、一定量の魔力を流し込み発動させる威力固定型だそうだ。

魔術魔法の方は特殊で、符に頼ったりせず魔法を発動させるための式の構築を魔法を発動させたいときに行うものだそうだ。一瞬で構築するだけの技術がない限りは戦闘には使われず、時間をかけてもいいもの、儀式などに使われるそうだ。また、魔力の消費は魔法式の構築で多少軽減できるものの、他に比べて大きいらしい。

この世界でメジャーなのは精霊術魔法である。それを聞いてハルは納得したようだった。

「で、精霊術魔法、一般的には精霊術と呼ばれてるんだけど、こっちなら魔法を発動するときに精霊が活発化してその空間だけ揺らぐのが最近だけと分かるようになったの。だからそれで認識できるし、精霊に言を送れるようになるの」

逆に魔術魔法のように精霊を介さないのは無理らしい。符術魔法も同様で、スズの見解は「力は力であって意思を持つことがないからだろう」というものだった。この見解は梓にはよく分からなかったが、魔法の仕組みについては理解することができた。

そして、スズは今、この板を動かす精霊に目的地まで移動するようにと言を送っているらしい。

「じゃあ、言を送れない相手っていうのもいるんですか？」

それにスズは若干引きつった笑いを顔に出して答えた。

スズの力というのはその物体や精霊の意思を捻じ曲げて行使されるものであるため、自分の意思を貫くことができる、言い換えればものすごい頑固者には通じないらしい。

また、言葉であるため、耳の聞こえない人にも効果はないらしい。

「それと……魔法とかで言を無効化できるらしいんだけど、それはあたしの知る限り一人しかいないし。あとはせいぜい言を跳ね除け

るほどの干渉系の力の持ち主もかなあ。会ったことはないんだけどね」

干渉系の力を持っていれば言の干渉を妨げ、逆に自分が操られる可能性もあるとスズは言った。

しかし、スズは自分と同じ干渉系の力の持ち主には会ったことがないそうだ。それにスズの知り合い（符の用紙の購入を頼んだ人）によるとスズが干渉系の中ではかなり上の位置にいるらしい。

「すごいんですね」

「すごくはないよ？　だって、干渉系の中では強くても実際のあたりは弱い方だしね」

先手を取らないと負け、後手に回った場合はカウンター狙いくらいしか戦う方法がないとスズは言った。干渉系はどちらかといえば受身の力なのだそうだ。

「ところで梓は帰ったらどうするつもりでいるの？」

「そうですね。とりあえずは普通の生活に戻りたいです。それと、なんとなく、家族に会いたいなと思ってます」

「そっか。そうだね。家族かあ……」

スズは感慨深げに言って、再び空を見上げた。

スズの家族というのを梓は知らないが、何か特殊な事情でもあるのだろうか。聞きにくかったので聞かなかった。ハルが興味津々であり、何度も梓に聞くように行ってきたのには腹が立った。

そうこうしているうちに港が見えてきた。スズによると海の状態によって、船が出港しない日もあるため乗船券に書かれている乗船日から一週間は船に乗れるようになっていた。そして梓の分はちゃんと準備できているはずらしい。板はゆっくりと減速しながら港町、

西橋せいきょうへと入いっていった。

## やっと辿り着いた大地で

西橋の町は港町なせいか、梓たちがいた首都とはまた違う雰囲気があった。髪の色が違う人、服も梓たちのような洋服を着ている人もいる。歴史の授業にあった文明開化の頃のような雰囲気があった。その頃と違うのは差別がないように感じられることだろうか。

スズはいつの間にか姿を消していた風姫と話して、梓の分の乗船券を受け取っていた。

「そつえば風姫さんはどこへ行っていたんですか？」

《主様の所へ、報告に行っておりました。私は風ですので、一番速いんですわ》

さらに風姫は天候に問題はないので船は明日の朝に出航すると教えてくれた。しかし一晩、宿に泊まるお金がない。この日の晩も野宿をすることが決定した。

船は魔法によって動くのだそうだ。次の昼、出航した船の上でスズがそう教えてくれた。

見た目は帆船のだが風の魔法を使って望む方向に進ませることができ、またスピードも普通の船よりも断然速いため、三日もあれば西の国に到着すると教えてもらった。

予想以上の速さに驚きつつも変わっていく景色や、元の世界ではよほどの場所に行かないと見れなくなった満天の星空に感動した。揺れもほとんど感じなくて夜は寒くもなくゆっくりと眠ることができた。スズによれば魔法を使って船内の温度を調整しているのとだ。改めて魔法はすごいと思わされた。

「んー。久々の地上！ー！」

スズはうれしそうに西の国の大地でジャンプをした。

「今頃向こうのやつら悔しがってるよ。ざまあみろって感じだよ」

帝たちのことだろう。スズはさらにうれしそうに笑った。

西は東と雰囲気は全く違った。港からすぐのところ、西の首都があるのだそうだ。高層ビルに車、近代的な設備がそろっていた。

東は文化を大事にし、西は進歩を重視した結果だそうだ。どちらも大事なことだろうが梓には西の雰囲気の方が自分のいた世界に近い雰囲気だったため、東にいたときよりも気持ちは落ち着いていた。迎えが来ているはずだと言ってスズは周囲を見渡した。しばらくして迎えを見つけたのか、スズはうれしそうにそちらへ向かってかけていく。

出迎えた人物は黒いコートを羽織、真っ白い髪をしたとてつもの目立つ人物だった。肌も白く、前髪の奥に見えた瞳は銀色と言えはいいのだろうか、白ではないが灰色にしては輝いて見える色をしていた。

「はじめまして。ワタシはローヴェイジャック・ノワール・イリオ  
ミエイジといます。どうぞジャックと呼んで下さい」

真っ黒で真っ白なジャックはそう言って礼をした。梓も自己紹介をしつつ礼を返す。

そしてジャックはすぐに向きを変えて歩き出した。結構早い。

「さっさと戻って、アリスに会ってもらわないといけませんから人目の少ないところまで行ったら一気に転移します。まあ、ワタシが歩きたくないというのもあります、アナタがたもそれでいいですよ」

疑問系でありながら決定事項であるような口ぶりに二人は何も言わずについていく。

梓はさながら田舎から出てきた人みたいにあたりをきよるきよると見ている。ときどき何かに感動するような声を出している。

「そういえば、飛行機とかってないんですか？」

「飛行機とかはね、うーん。作れないんだよね」

「作れない？」

「うん。動力は魔力、魔法で、車くらいの重量ならまだ動かせるけど、飛行機となると鉄の塊、大人数、長距離になるでしょ？ さすがにそれを動かすのは無理なんだよ。複数人で魔法を発動してもいいんだけどそうすると魔法が安定しないし」

最後の安定しないというのはハルが同意した。なんでも

《神の力を合わせて何かをするときは力の相性よりも力の出力のバランスの方が大事》

なのだそうだ。雷雨なんかはその典型らしく、雷ばかりなる雨や雷がほとんど見えないということが起こるらしい。

《しかし、ここはこの間までいた国と全く違うな。普通、文明の進歩つてのは程度の差はあれどあんなにも大きな差は生まれえないはずなんだけど》

「それはアチラさんが拒否をしたからだよ」

「へえ……ってハルの声が聞こえてるんですか!？」

ハルの何気ない呟きに答えたジャックに驚きを隠せない梓。逆にジャックの方は聞こえることの何がおかしいのかという態度である。スズが説明をすると、ジャックは納得したようなしてないような

感じて頷いた。

「ワタシには聞こえる、ということでしょう？　ならそれでいいじゃないですか」

《俺もそれでいいぞ。で、さっきの続きは？》

「ああ、こつちからアチラさんに物を持って行って勧めたら「我々の文化を愚弄する気か」と怒鳴られたそうですよ。その結果が今ですわね」

ジャックはそう言った。

梓は便利なものはどんどん利用すればいいのにと考えたが世の中そう簡単にはいかないらしい。

しかし、自然と取り入れられた技術もあつたらしく、船がその代表なんだそうだ。

東でも西でも漁業が盛んなところがあり、魔法で動く船は移動が安定するということで広く普及したらしい。船の形状にもよるがそこまで大きな魔法にはならないので、少し魔法が使えるくらいの人なら問題はないらしい。

「まあ、そんなところですね」

説明を終えてジャックは立ち止まった。すっかり人気がなくなつた場所で三人は手を繋ぎ転移をした。

転移をした先にいたのはメイドさん。銀髪の、膝に届くほどのみつまみに、長いスカートをはいた彼女がここから先の案内をしてくれると言つてジャックは去つていった。

そしてスズと一緒に案内されたのは青空に太陽が輝く南の島のような場所にあつた、石でできていている広場だつた。

影のところに座る場所が用意されていて、お茶とお菓子もあつた。



「お嬢様を呼んで参りますので少々お待ちください」

そう言ってメイドさんはどこかへ行ってしまった。

## 見当違いな南の島での出会い

「スズさん。確か、ここに来る直前は建物の中でしたよね」

「そうだね」

「確かドアを通って来ましたよね」

「うん」

ぱつ、という音がしそうな勢いで梓は自分が歩いてきた方向を確認する。

距離があるからか通ってきたはずのドアは見えない。

ここは柵もない、きれいな円形をしていて梓たちはそこから数歩分だけ離れたところにある同じように足元を石で固めてあるところでお嬢様とやらを待っている。

スズは慣れているのか、のんびりと用意されていたお菓子を食べている。

《しかし、ここはえらく不安定な世界だな》

「まあ、アリスの意思でそうしてる世界らしいよ。たくさんの世界の不安定が集まる場所だからってのもあるらしいけど」

「だってさ」

辺りを見渡しながらハルにそう返した。

スズは梓を呼び、おとなしくお茶を飲んで待っていていけばいいと言ってくれたがいまいち落ち着かない。波の音が聞こえる環境に普段はいないし、遊びたいなと思いつつながらお茶に手をつけた。

「ところで梓。さっきの声って誰の？」

「ハルですけどそれがどうか、しま、した……」

スズの質問の意図が一瞬分からなかったが、聞き返す途中で気づいた。

スズにはハルの声は聞こえていないはずである。それなのに聞こえた。不思議なことである。

《てことはこの空間の主が何かしたな》

「んーまあそうだと思うよ？ アリスだし」

《アリス？》

「この世界の管理人だよ。ここはアリスが創った世界なんだよ」

「そして、ボクはきみらを元の世界に返すことができる力を持った人間だよ」

スズの返答にあわせて別の声が続いた。

声のした方を見ればここまで連れてきてくれたメイドさんと一緒に一人の少女がいた。年のころは梓やスズとそう変わらない。鮮やかな金髪に明るい緑の瞳。服装は真っ赤なチャイニーズな物であった。スリットが入った丈の短い、袖のないものを着て、ひざ上までの長さのズボンをはいている。そちらは黒かった。

おそらく彼女がアリスなのだろう。彼女は不敵に笑って、メイドさんがいつの間にか用意した椅子に座った。

「おかえり、スズ」

「ただいま」

「そしてようこそ、吉住梓に、神様のハルだね。ボクはアリス。アリス・スヴェンヒルダ。話はウツキから聞いているよ」

《ウツキから？》

新しく出てきた名前は梓にとっては知らないものだった。ハルにお前と出会ったときに俺を追いかけていたやつ、と説明されて理解した。確か、ハルとなにやらものすごい理由で仲違いした人のはず

である。

それはさておき、そのウヅキという人は梓が異世界に行ったのを確認した後、すぐさま神界のトップに会いに行ったそう。そこで説明をして、連絡を取ったところがここ、レイゾイルという異世界にある何でも屋だったそう。

レイゾイル社はこの世界のことだけではなく、必要があれば異世界からの仕事も引き受けており支社がある異世界もあるそう。

この国での地位はかなり高い位置にあるらしく社長は侯爵の地位をもらっているそう。侯爵がどれくらいの位置にいるのかは梓にはよくわからなかった。

「スズはそんなレイゾイル社の社長令嬢ってことになってるんだよ」

「実際はここに拾われてレイゾイルという姓をもらっただけなんだけ」

そう言って二人は笑った。

「キミらが帰る準備をしておくからお風呂にでも入っておいでよ。ここはいい温泉があるんだよ。それと水皇<sup>みお</sup>、炎樹<sup>えんじゆ</sup>。二人の服を洗濯しといて」

その声にあわせて、二人現れた。一人は平安時代の男性を思わせる姿をした少年。紙も目も明るい空のような青さで、服は真っ黒である。

もう一人は現代的な感じの少年。長袖のジャケットを着て、ジーンズをはいている。髪と目は炎のような鮮やかな色である。

二人は見た目は同年代に見え、青い方が水皇、赤い方が炎樹だと紹介された。

そして温泉に案内され、梓だけが先に出てきた。スズはゆっくり

しているつもりだそう。梓もゆっくりしていたかったのだが、なぜかハルがえらく急かしたのだ。

スズからはもったいないと言われたが、ハルがうるさいのに耐えられなかった結果である。

「そんなに急いで何がしたいの？」

《あのアリスってやつにいろいろと聞きたいことがあるんだよ》

いろいろと言え、梓はスズのことを聞きたいと思った。

拾われたと言っていたから家族がいないのだろうか。でもなんとなく違う気がする。根拠は勘である。

だから梓は先ほど案内された広場で何かをしているアリスにそう尋ねた。

「いい勘だねー。ほめて使わす」

「教えてくれるんですか？」

「そういうことはスズに直接ききなよ。ボクが喋るのは間違ってるから」

しかし、アリスはその件については教えてくれなかった。

そしてハルの質問には丁寧<sup>スズ</sup>に答えていた。おそらく、他人<sup>スズ</sup>のことではなく自分のことだからだろうということ<sup>アリス</sup>は予想できた。そして、その内容はあまりにも梓に理解しがたい内容だった。

《スズのやつは世界、って言ってたが、ここってどんなところなんだ？》

「世界名『サイハテ』。ありとあらゆる世界の歪<sup>いびつ</sup>の集合場所」

《歪<sup>いびつ</sup>つてのは？》

「世界は互いに干渉しあっている。その干渉によって生じた、その世界にはありえない現象を世界が強制的に排除したときに生まれる

整合性の取れない現象によって生まれた結果のこと。現象ではなく、結果ね」

《この世界が不安定な理由はそれか？》

「そ。安定した世界には歪は入り込めない、されど歪によって生まれたものが狭間にあり続ければそれはさらに歪を生み出すことになる。だから不安定であるここに呼び寄せる。呼び寄せた後はここに閉じ込めておけば何とかなるしね」

といった感じである。アリスは何かの作業をやりながら、二人は結構話し合っていたがさっぱり理解できないので、話題を変えたいのに話題が見つからず、梓は仕方なくメイドさんが淹れてくれたお茶を飲んでいた。

そのお茶をカップに三杯ほどゆっくりとしたペースで飲んでいるとスズが温泉から戻ってきた。

そしてアリスが強制的に話を終わらせた。終わらせて再び席に着く。そして梓にこう言った。

「ちなみにだけどね。スズもそんな歪の一つだよ。もともとは異世界にいたんだよ」

ボクから言えるのはそれだけだよ。だから後はスズに聞きなよ。そう言っただけアリスは戻ってきたスズに冷たいお茶を勧めた。

お別れはなにも言えずやってくる

「あんまりよろしくないお知らせがあるんだけど、聞きたい？」

冷たいお茶を飲みながら、アリスは切り出した。

何でも梓とハルに関係のあることらしい。聞かないわけにはいかず、話についていけなくて放心している梓ではなくハルが先を促した。

「ウヅキから梓に関してはできるかぎり元の生活に何事も無かったように戻るようにしてほしいって頼まれてたんだけど、それ、無理になった」

《具体的に》

「ハルを梓から剥がす。梓が望めば記憶を消して、時間軸の調整の二つかな」

一つ目が無理になったので自動的に二つ目も無理になったそうだが、記憶を消してもいいのだがそうなると元の世界に戻ったときにハルの存在のことでパニックになる恐れがあるからだ。

無理になった理由はハルの魂が梓の魂と同化してしまったからだそうだが、ハルの力を使えるようになったことがその現れであるそう

だ。  
つまり梓は神の力が使える人間になったということだそうだ。

《じゃあ、俺は梓が死ぬまでこのままかよー！》

八つ当たりのようなハルの声をアリスはしれっと無視した。

「ボクも長い間生きてるけど、キミらみたいなパターンは初めてで

ね。そもそも死ぬってことがあるのかもわからないんだよ」

人が神に力を借りる場合は問題ないそうだが、今回は魂が神のものになっていてるためアリスも予想がつけられないそうだ。いくつかの予想はできているらしいが。

「どれにしてもいい結果とは言いがたくてね。梓はともかくハルの方は自業自得って言葉がぴったりくるような理由だし、やつ当たられても困るっての」

「自業自得？」

アリスの言葉に梓が反応をした。アリスは意地悪そうに笑ってその反応に応える。

「そうだよ。ウヅキが楽しみにしていた甘味をハルが食べたんだって。それで怒ったウヅキから逃げてる時に見つけた梓を盾にして異世界に逃げてきたって訳らしいよ」

一息に説明された梓の唇がいびつに歪んだ。ひくひくとひきつった笑いになり大きく深呼吸をした。

スズがアリスに本当なのかと確認して、ニコニコと笑うアリスがそれを肯定した。

「いま、すごいハルが憎いんですけど、どうすればいいでしょうか」

その梓のあまりにも静かな殺気に、絶対に殺されないと思ったアリスも冷や汗をかいたと後日語っている。そんな状態で口許だけが笑っている。

スズは思わず顔を反らし、ハルはさすがになにも言わない。何か言った瞬間にそれがどんな内容であれ起爆剤になることがわかった



からだろう。

「ま、まあとにかく？ 帰る準備はできてるし、いつ帰る？ お土産の準備もできてるよ。でもまあ今はさすがにね。スズ」

「何？」

「頼んでもいい？」

スズは大きいため息をついてアリスに軽く文句を言ってから梓を眠らせた。

メイドさんに梓を運ばせて、スズにそばにいるようにと言った。諦めたようにそれを引き受けたスズがアリスはどうするのかと尋ねれば、アリスは何も答えず作業をしていた円形の広場に向かった。

数時間もすれば梓は目を覚ました。眠る直前の怒りは残っているもののだいぶおちついたと実感できた。

「本当ですか？」

そんな梓が口にしたのは、すぐ横にいたスズへの質問。

スズは梓が起きたことに気づいておらず、それに気づいてから梓が何を言ったのかを聞いてくる。

「スズさんは元々はこの世界の人じゃなかったって本当なんですか？」

「それ、アリスから聞いたの？」

寝たまま頷いた梓にスズは静かに肯定した。

簡単ないきさつも、話してくれた。そして、スズは最後にこう言

った。

「あたしの家族はもうあつちにはいないんだ。だからあたしはこつちを選んだの。でも、梓はちゃんと帰って梓を待っている家族に会いに行つてあげてね？」

涙が出そうになった。

スズはおちついたらアリスが待つてるし、さっきのところに戻るうかと梓を起こした。アリスのところに着くまでの間、いままです一番気まずい時間を過ごした二人は大人しくアリスの説明を聞いた。どうやら時間軸もいじつてあつて、向こうの世界に戻ったときは梓が巻き込まれた一時間後になっているとのことで、家族にそこまでの心配をかけないようで安心した。

「それとこれ、お土産」

アリスが渡してきたのは五百ミリリットルのペットボトルのような容器。その中にラムネ菓子のようなものがいっぱい入っている。

これを飲めば一発で夢の中。六時間の強制睡眠と引き換えに夢の中でハルをボコることが出来ます。あなたの体にはダメージはありませんし、ハルにとっては現実になるのです。といかにも胡散臭い通販の口調での説明を受けて、梓はすぐさま一粒口に入れようとしたがアリスに止められた。

「帰ってから飲みなよ。今は向こうでウツキも待つてるしさ」

渋々と頷いてアリスから無くなった時のための連絡先が書いてある名刺を手渡された。そのままアリスに言われるがままに広場の中央に立つ梓。

アリスが勢いよく手を合わせ、合掌の形を作る。その時に発生し

た音のあとに一拍置いてアリスは魔法の発動を宣言した。

「『陣式ジンシキ 渡ワタリ』 『重符式カサネフシキ 時渡トキワタリ』」

梓の足元に円形の、なにかがたくさん書き込まれた模様が出現した。さらに符がその模様に重なり、新たな模様を作った。

「そつだ、これからもし困ったことがあつたら古時計という喫茶に  
いる大禍時の店主に会いに行けばいいよ。きっと何かの力になって  
くれるから」

その言葉を最後に、梓の異世界での生活は幕を閉じた。

## これからが本当の始まり

(時間軸の調整って言っても向こうを強制的に止めただけだから、このあとその反動が来るんだけど……。梓には悪いけどハルやウツキに頑張ってもらおうと。大禍時も紹介しておいたし、大丈夫でしょ)

アリスはそう考えた後にしんみりとしているスズに声をかけた。

二人はこれからの東の国への対応に追われることになる。アリスに小言を言われながら向こうが謝って来るような方法を考えなくてはならない。

「向こうはどっちが悪いかわかってて文句を言うてくること間違いないから。一度叩きのめしとかなないと。昔一度やってやったのに懲りないやつら」

ドアを出現させてアリスが言ったことに呆れるスズ。

アリスは喧嘩を売られたら相手を徹底的に叩きのめし、挑発されたら相手を適度に叩きのめすという考えの持ち主である。なのでその言葉は当然のものだろうが、さすがに国のトップにそんなことができるとは思えない。

しかしやると言ったらやる。これまでにアリスが不可能だということを見たことがないスズは無理だと思いつつもやってのけそうだと、向こうのことが心配になった。

「その前に梓に補足説明みたいなのを送っておかないと。スズは何か書きたいことある？」

気づくとそこはローマ時代な宮殿の中のような場所だった。目の前にはいかにもな白髭を生やした長い白髪で頭のとっぺんが禿げている老人がいた。その横には梓より年上の、青年という表現でちょうどいいくらいの男性が一人。

二人は驚き、安堵して梓に優しく声をかけてくる。ハルが今にも逃げようと声をかけてくるが、無視。

「この度は僕の孫が悪いことをした。ウヅキよりことの内容は聞いている」

「俺がそのウヅキだ。俺もその原因を作った側だが、馬鹿<sup>ハル</sup>が迷惑をかけた。申し訳ない」

梓はまじまじとウヅキを見る。男性の髪型にはあまり詳しくないが、坊主、というわけではない、スポーツ刈りと言えはいいのだろうか。少なくともウヅキの見た目は甘味を食べられて怒るようなタイプには見えなかった。

そして、老人の方はどうやらハルの祖父にあたるらしい。二人を見ていた梓は二人からもじっと見られていることに気づきあわてて頭を下げる。

「この度はハルに迷惑をかけられました、吉住梓です」

《迷惑なんてかけてねーだろが!!》

「馬鹿孫は黙つとれ」

「同意だな」

《くっそー。お前らが組むのは反則だぞ……》

ハルの意見を無視して祖父は望むなら今すぐ帰すが、その前に話があると言った。

「当然だが、今回のことでお前らには罰が必要だな？」

「その通りですね」

《はあ？ 俺は悪くねー》

「煩いわ」

ハルの祖父が梓に拳骨を降り下ろした。頭に直撃したのに梓は全く痛くない。逆にハルの方が沈黙した。ひよっとしたらハルの方だけダメージが行っているのかもしれない。恐るべしじーちゃんパワァー。

「この馬鹿は……。で、その罰の内容だが。ウヅキ。人界に行ってお前らが起こしたことによって調子づいとる凶<sup>まが</sup>どもを狩ってこい。上の方から見せしめも兼ねてサイハテに流れていかんように処理をしとくと聞いているからな」

「わかりました」

ウヅキは淡々とそれを受け入れた。表情は読み取れない。

老人は今度は気まずそうに梓の方を見た。

「その馬鹿にも同じ罰があたっているが、そうなると梓殿も巻き込むことになるがよろしいか」

「……………それが仕方のないことなら」

梓の承諾を聞いて老人は人懐っこそうなにかっという感じの笑いを浮かべた。

「いや、よかった。迷惑をかけるがウヅキを護衛につけるしこれで問題は無くなった!」

豪快に笑う老人。ぽかんとしているウヅキ。復活したのか威勢よ

く文句をいうハルに諦めることにした梓。

四者四様のなんとも言えない空気を破ったのは老人だった。

「ウヅキは見た目を調整。力はそのまま残すが肉体の強度や身体能力を人間のものにして梓殿の通う高校に入学する事」

ウヅキがしようとした反論を老人は先手を取って封じた。

何でも、今回ウヅキにはそこまでする必要はないかもしれないが、ハルがこんな状態なのでその原因を作るのに意図せず加担してしまったウヅキにそれくらいやれとのことだそうだ。

「梓殿。学校は？」

「桂城高校です」

「クラスは？」

「一年五組です、けど」

それがどうかしたのかと聞く前に老人はさっさと話を打ち切り梓を家へ帰すようにウヅキに命じた。

ウヅキは素直に従った。

その後はただただ流されるまま連れて行かれて、すっかり暗くなつた道を梓の案内で進み、梓が家の中に入るまでウヅキは見届けてくれた。最後までハルがわめくだけでこれと言った会話はなかったのだが、途中で一言だけウヅキは梓に謝罪の言葉を述べた。梓は最後に送ってくれてありがとう、とだけ言った。

そして、それから約三カ月後。

夏休みが終わり、二学期が始まった。

あれから特に何事もなく過ぎ、凶の退治とやらも始まらず、護衛に来ると言つたウヅキも現れない。アリスに紹介された古時計の大禍時の店主にも会いに行つてはいない。ただ古時計の場所だけは確認はしてある。意外なことに学校から近いところだった。家からも

そう遠くなく、いつか行こうと思っ  
ているうちに時間は過ぎていた。  
ひたすらうるさいハルの存在と、  
夢の中でハルを殴れる薬、とき  
どき届くスズからのメールを除  
けばすべてが夢だったと思える  
ほど、何事もなかった。

「梓！宿題やった？」

「あれ？ やってないの？」

「そんなことより！！」

「いやいや」

宿題の方が大事だろうと思  
いながら調子のいい友人の言  
葉におとなしく耳を傾ける。  
今日提出の課題を確認しな  
がら聞こえてくる単語は、  
転校生、すごいカッコいい、  
スポーツ少年みたい。

ハルが何かに気づいたよう  
で騒ぐが、梓は特に何も思  
わなかった。授業が開始さ  
れ、担任が入ってくる。転  
校生がいるといわれ、紹介  
のために入ってくる。

転校生が喋りだすよりも先  
に、女子がそのかっこよさに  
うっとりするよりも先に、梓  
は、ハルも声を張り上げた。

「ウツキ君！？」

《ウツキ！？》

転校生はそんな声を無視して  
挨拶をした。

「村中卯月。よろしく」

それから約一ヶ月後、梓は  
とある人物と再開を果たすこ  
とになる。しかし、そこに  
いたるまでの間に起きるさま  
ざまなことによって、梓は再  
開するまでその人物のことを  
すっかり忘れてしまうのだが、  
それもまた、別の話である。



さらに、このとき。ウヅキのことを名前で呼んでしまったために  
クラスの女子をはじめとした多くの女子を敵に回してしまったこと  
に梓はまだ気づいていない。

## これからが本当の始まり（後書き）

これにて、『世界はどうやらとりあえず優しくはなかったようです』は完結です。

今まで読んでくださってありがとうございますございました。

以下、後書き的なつぶやき。

えーっと、この話は、どういうポジションになるんだ？

スズ三部作？

えっとー、あいつとあいつと、これとあれも含めたら『スズ四部作』ぐらいになってそうです。

スズがちよつと絡むだけの話もありますがね。

いや、正確には『スズ二部作 + 』っていう表現が正しいのか？

いやいや『月華三部作 + 』？

まあ、いいや。

とにかくこれは自分の中の一部作品にとっては番外だし、この話はこの話で本編です。

改稿版書くに当たって生まれたキャラでもあります。

誰がと言つか梓が。

ちなみに月華は『神崎涼の失踪』で出てきます。

そちらもよろしければぜひ。

それでは後書き的なつぶやきは終わりです。

今日までお付き合いくださりありがとうございますでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2019/>

---

世界はとりあえず優しくはなかったようです

2011年3月16日00時09分発行